

---

# 初音ミクの奔走

SNEO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初音ミクの奔走

### 【Nコード】

N9263I

### 【作者名】

SNEO

### 【あらすじ】

ボーカル：ケイ（楽器の出来ないボーカル）

ピアノ：トオル（全体音感を持ったピアノ）

ギター：ダイ（売れないバンドのギターボーカル）

思いつきのように結成したバンド。

そして思いつきのように解散したバンド。

彼らは思い思いに奔走する。

### 3ピース

スタジオには絶えず音楽が流れている。彼らの音楽もまた、そこから始まった。

ドラムは軽快な音を奏でる。ひとしきりでたらめなリズムを叩き終えると、ケイは満足そうに言った。

「こんなのどう？」

長い前髪をうつとおしそうにかきあげる。染色された前髪の間から、くつきりとした二重の目があらわれる。まばたきを数回する。

ピアノを弾いていたトオルは、軽快な指の動きを即座に止めて、  
「デタラメすぎ。ねーよ」  
と笑ってみせる。

その間、黙々とギターを鳴らし続けていたダイは、我関せずといった様子。

トオルは、ダイの方を見て、

「うっせw」

と一言。ダイは苦笑いを浮かべ、首をふらふらと横に振った。まるで首のすわっていない子供のようなこの動作は、彼の癖であり、ダイを除く二人はいつもそれをからかう。

ドラムに飽きたケイは、ふらふらとトオルに近づいた。

「とおるちゃん、いけそう？」

トオルは少し考えると、ケイの方を見て、

「解散だなwww」  
と漏らした。

## 「ケイ」リクルートボーイ

「当社の志望度は100%でいうとどのくらい？」

「43%です」

表情一つ変えずにケイは言い放った。

「低いね。じゃあ何で受けたの？」

「業種を広告にしたら、たまたま引っかけただけですが、いけませんか」

面接官は30手前に見える。毛も薄く、たよりなさそうだが、面接官というだけで学生にとっては、脅威に値する。

「いけなくはないんだよ、でもさあ、それを正直に言われちゃうと落とさざるを得ないから……」

ケイは少し口を尖らせて数秒考えた。面接官は、ケイの表情から、その内心を探ろうとして、諦め、結局は投げやりな態度に移行した。「他に質問とかないですか？」

「ふむ」

右手を唇にあてて、顔を前に傾ける。ケイが考え事をする時にとるポーズだ。彼は、困ったときには眉を寄せ、首を12度ほど右に傾げるだとか、手を振るときには決まって手の甲を見せるとか、そのような細かなルールにのっとって生活している。そうしなければいけない理由はどこにもない。しかし、彼にとってこれは非常に重要なことであつたし、それをアイデンティティとして捉えている節もあつた。

頭の中で、ブーンというモーターの回転音をイメージする。どんなに思考しても、物理的にみて脳は決して回転はしない。脳細胞の温度が上昇することはあろうとも。

彼がイメージするのはあくまで象徴的なところである。

「なぜあなたは多くの企業の中から、御社を選んで入社されたんですか？」

隣の部屋から、わずかに学生の話す声が聞こえる。今ケイがいるのは、おそらくこの会社の打ち合わせスペースのようなところであり、厳密にいうとプライバシーの保護においては完璧ではない。意識を集中させれば隣の会話を全て拾い集めることもできる。それは、魚の小骨を箸で1本1本抜くような作業であり、彼はこれが大嫌いだった。

「僕がこの会社を選んだのは、やっぱり人だな。就職活動で出会った面接官は皆優しかったからね」

「それは、人事にも学生を集めなければいけないというノルマがあるからじゃないですか」

スペースの空気が僅かに歪む。ケイはそれに気付くと、

「いや、別に人がいいというのを否定しているわけではないんです。ただあなたが学生るとき、そんな風には考えなかったのかな、と思っただけです」

フオローしたつもりが、余計に深みにはまっているのを肌が感じる。脇に嫌な汗が滲む。

「そんな風に人を疑っていたら、先に進まないからね」

ああ、怒らせてしまったな。ちよつと面倒になってきた。

「先に進むためならある程度の犠牲はいとわない。それがあなたの人生においてとても大事なものであっても。バイ俺。それでは」

ケイは真っ黒なコートを椅子の背もたれからひったくると、倒れた鞆を掴み、さっそうと出て行った。誰も追って来ない。追われてもいないのに、逃げるんだな、俺は。

## 「ダイ」ライブアディクト

ギターのコードを順番に拾っていく。それは決して難しいことではない。そうして最も分かりやすい形の音楽を作り上げる。

芸術には必ず二つの形がある。一つは、天才的な閃きや発想で今までにないものを生み出すもの。そしてもう一つは、今までにあるものをブラッシュアップするもの。どちらが優れているというわけではない。ただそのような系統があり、ダイの場合は、後者にあたる。

髪は雑誌で流行っていると書かれていたアシンメトリー（左右不対称）にカットしてある。服は、雑誌に載っていたアメカジの廉価版だ。いつもポケットに手をつつこんで首を揺らしている。

彼の最も厄介なところは、一般的でありたいと思う傍ら、自分のアイデンティティを強く持ちたいと望んでいる。集団でありながら、孤独を願う。しかし、これは決しておかしいことではない。誰だっ てそうだ。他人と違うのは嫌だし、他人と同じなのも嫌。彼もまた、そんな一般的な感覚を持ち合わせているといっても過言ではない。

とにかく、彼は正統派のバンドマンなのだ。一般的に共感しうる恋の歌詞を書き、また聴きやすいどこにでもある曲をつくる。

「えー、どうも、大阪で活動しているハイスクールブランドです。みなさん略してハイブラと呼んでくださいーい！」

それなりのレスポンスが返って来る。観客は、20人くらいか。よく集まったほうだ。その中には知人が、

15人くらいいるわけだが。

「えー、なんだろう？盛り上がってるかいっ！」

キーン。

ハウリングで語尾が飛んだが、観客は手をあげて応える。友人からの彼の評価は概ねいい。いや、一般的には高いと言っても問題ないくらいだ。

「じゃあ次の曲は、今、悩んでいる人に聴いてもらいたい曲です。曲名は、『光』お願いしまっす！」

ドラムソロで始まった曲は、次に、ボーカルとともにギターが響く。必要以上のポリリズムでライブハウスは細かな振動に襲われる。そんなとき、彼は強烈なエクスタシーを感じるのだ。

観客は、なおも体を揺らし続ける。

「アマチュアバンドとしては、テクニクはすごいな。でも、もううんざりだ。出よう」

後方でパーカーをかぶって曲を聴いていた青年は、耳にかかった髪を一度かきあげて、気だるそうにライブハウスを出た。

## 「トオル」孤高のピアニスト

まだ、耳がキンとしてる。何で日本のライブハウスってのはこんなに音量上げるんだろ。まあ外国のライブハウスなんか知らないけど。

「トオル、まだ途中だぞ。最後まで見てけよ」

「すいません。ちょっと腹痛くなって」

わざとらしく腹をさすりながら作り笑いを浮かべる。

バンドの先輩に、友達が出るから来いって言われてきたが、ほんと時間の無駄だな。

と心の中でつぶやく。ライブハウスの熱気で忘れていたが、テールロードのジャケットだけではこの寒さには耐えられない。灰色の空と、後方で聞こえるやかましい音。きつと音楽が好きとか、自分のことを認めてほしいって気持ちで空気を震わせてるんだろう。

「またそれが。今度のライブまでに3曲は作ってもらわないといけないんだから。いい起爆剤になるかと思ったんだが」

先輩は髪をかきむしりながら話す。その耳には大きなピアスがついている。

この人の少し鼻にかかる声は嫌いじゃない。

でも、残念ながら好きでもないんだな。

「作りますよ。てゆうかいつも作ってるじゃないですか」

トオルは瞬きもせず応える。白い息が高く空に吸い込まれる。ドラムの刻むリズムが先輩のコートのファアを揺らす。

「お前の作る曲好きだよ。爽やかで、疾走感がある。ただ次はもっとフックのあるやつが欲しいな。周りにあるもの全部に喧嘩売ってるやなやつ」

そんな曲は先輩の声には似合わない。第一、音量が足りないだろ。「喧嘩」ですか。したことないですね」

トオルは丸く猫のような目を閉じて言う。かじかんだ手をポケット

トにつっこむ。

「まあとにかくピアノ、弾きたいんで、帰ってもいいですか」

黒のオールスターの爪先が、地下鉄の駅に向く。渴いたアスファルトがそれに呼応するように、鋭い小石の摩擦音を生む。

「おお、そんじゃ、頼むぞ、トラックメイカー」

「ういっす」

言われなくても、自分の音は自分で作るさ。感情と同じで、誰にも深いところは見せないままで。

## 「ケイ」ダストメイカー

気晴らしにマフラーを買った。カラスみたいに真っ黒なやつだ。

2月か。夏には家の近くの田んぼをコウモリたちが不気味に飛び交う。その姿は、子供の頃には蝶に見えていた。今では、なんだろう、普通にコウモリかな。

大学に入るまでは、パソコンなんか持ってもいなかったのに、今ではテレビはつけずに、パソコンの前に座っていることが多い。何をするでもなく、ネットをぼんやりと眺めている。

高校生の頃、よくなった気持ちだ。一言で言うと、焦燥感。それも自分に対して、だ。

何かしなくちゃいけない。高校の頃は、勉強だった。でも怠惰な自分はそれを後回しにして、結局1日を無駄に使う。それで夕暮れになって妙に焦って、でも、何もしなくて。そうやって1日が、1週間が、1年が過ぎていった。

結局、受験ぎりぎりで何とか頑張って、ランク落とした大学には進学できたが、悔いが残った。今でもそんな生活を続けている。

そんな自分を変えたくて、就職先は銀行や金融主体の大学でありながら、広告業界を選んで、既に40社ほど面接を受けている。もつとすごいやつはいくらでもいるだろうが、自分の周囲じゃ就職活動をここまでやってるやつはいない。それに内々定は既に一つ貰っている。

就職活動は、希望と挫折の連続だ。認められて飛び跳ねるほど嬉しかったり、自分を全否定されたような気持ちになったり。そんなとき、いつもこれは通過点と自分を落ち着かせる。

子供の頃から、絵が上手かった。ずっと上手いと言われ続けて、調子に乗って最近通信教育まで始めた。でも、始めてみて分かった。自分が井の中の蛙だということを。きつと才能はあっただろう。でも、もうやる気もしない。そうやって昔から何でも半端だったことは分

かっているが、どうしても上手くない。

もう一つ、半端なことをしている。

今、パソコンを立ち上げて、ワードを開いて、文章を打つ。傍らには携帯電話を置く。

頭に浮かんだ言葉とメロディを携帯電話で録音する。そして思うままに、その言葉をパソコンに打ち込んでいく。これは、Aメロ、それで、次はBメロ。サビはこのメロディにしよう。いや、歌詞にしては盛り上がりがイマイチだから、これにしよう。

とか。そんな風にして、1時間くらい過ごす。それが何かになるわけでもない。楽器は一つも弾けない。楽譜も読めない。高校の音楽の授業で欠点取ったこともある。

でも、歌は好きだった。だから、こうしてオリジナルの曲を作るのは楽しい。

こうして作り貯めた曲の中にはメロディを忘れて、そのまま消してしまうものもあるが、自分の中で完成している曲はすでに10曲くらいある。この全ては、いずれパソコンのハードディスクと一緒に捨てられてしまう。

しかし本当に感覚的な話だが、この曲はいずれどこかで世に出る機会があるはずだ、となんとなく思う時がある。

突然、パソコンがブーン、とエアコンのような音を立てる。

ハードディスクが壊れるのも時間の問題かも、な。

## 「ダイ」スパイラルドッグ

最近買ったバスシュ。それに背中のギターケース。

俺はライブしたんだぞー。してきたんだぞー。って高揚感が多分にある。

「ダイ、今日の、よかったなー。あの3曲目のサビで入れたフェイクとか」

「ああ、あれな。何となく入れてみた」

嘘をついた。大好きなバンドBOCがやってたフェイクを真似ただけ。でも誰かが困る嘘じゃない。そうやってモラルは少しずつ欠如していくように思われる。それは少しずつ、シロアリのように、いずれ壊滅的な打撃を与えるものになるかもしれない。そんな危惧は昔からあった。

でも例えば、歯磨きをしなければ、虫歯になるかもしれない。そう言われて、必死に歯磨きをしたことはなかったろう。いつも、気付くのはそうなってからだ。

ダイはそれでいいと思っている。必要以上に注意深くある必要はない。

「それにしても、アッシュの仲田さん、途中で帰っちゃったな」

横を自転車を通り過ぎる。暗くてよく見えないが、緑の折りたたみ自転車。それを目で追っていると、目の前に陸橋がある。その横には線路があり、下には三級河川が流れる。遠くを見ると、いくつかの小さな光が見える。近くから煙が出ているものもある。光化学スモックを連想させる夜景。

「仲田さんて、ボーカルの、髭の人？」

ダイは首をゆっくりと振って、隣にいるベースの小川に尋ねる。

小川はずれてきたギターケースの肩紐をゆすって元の位置に戻して、「そうそう、前に飲み会で会って、その時に番号教えてもらったんだ。で、今日のライブ誘ったら来てくれるって。で、後ろの方で見

てたよ」

「ふーん。途中で帰ったってことはあんまりだったのかな」

「や、なんか一緒にいた黒髪の、多分俺らと同じ年くらいのヤツが途中で帰ったからそいつ追っかけたんじゃない」

小川の推測に、ドラムの坂下が横槍を入れる。

「その黒髪って、猫目だった？」

横を特急電車が通過する。陸橋に大きな振動が伝わる。会話が途切れる。ダイは、前からランニングをしてくる若者を避けた。

「坂下、知ってるの？」

電車は通り過ぎ、ランニングシューズと地面が当たる音だけが小気味よく聞こえる。ダイは左手の人差し指の腹に出来たマメを親指で確かめながら言った。

「ああ、多分、アッシュの助っ人メンバーで出てくるやつだよ。目立たない地味なやつだけど、ピアノは上手いんだよ。でも他のメンバーとは少し毛色が違うようだから、なんかいつも浮いてて、やっぱり印象的なんだよな」

ピアノか。ピアノと一緒に演奏したことないな。というか、いつも同じメンバーとばかりやってるからな、俺。まあそれはそれでいいんだけど、でもたまには他の人とやってみたいか。いや、まあいいか。

「俺、自転車止めてるから」

しばらく行って、ダイはメンバーと別れる。耳にイヤホンを入れ、BOCの曲を流す。勢い欲自転車のペダルを漕ぎ出して、流れる曲にハミングを乗せる。

就職活動は順調だ。バンドも順調。さて、俺はどうしたい。音楽で生きていきたいが、それも今すぐにつていうのは難しそうだと。とりあえず就職するべきか。せずに音楽に賭けるか。

いつも答えの決まった自問自答を繰り返す。

なわばりを確認する犬のように。

## 「タオル」ビックギフト

電気の点いてない、寒い部屋は人を少しだけ憂鬱にする。

天井にひつついたてんと虫のような丸い蛍光灯。そこから垂れ下がったクモの糸。タオルは迷いなくそれを引っ張る。2、3度瞬いて、電気が点く。糸にはボランテアをしていたころのIDカードが結び付けられている。入学当時、外国に行けるという理由で入ったボランテア部。そこで、今の彼女と出会い、そこそ楽しかったように思う。

本棚には、家族の写真が飾ってある。年寄り臭いと馬鹿にされることも多いけど、家族と仲いいんだね、と彼女が微笑んだのを思い出す。

テラードを脱ぐと、ヤカンのお茶をコップに注ぎ、一気に飲み干す。

しまった。うがいしてない。

急いで、洗面所に行き、うがいをし、コンタクトをはずす。やっと外から解放されたんだと思い、真っ白なベッドに顔から飛び込む。大きく息を吐き、今度は吸ってみる。埃っぽい空気が肺に流れ込むのがわかる。

部屋の真ん中に配したコタツが目飛び込んでくる。

コタツ、つけようかな。コタツには、剥いたまま忘れてしまったみかんの皮と、ノートパソコン、飲みかけのサイダーが置いてある。ずばらだな、ほんと。

タオルはむくつと起き上がると、コタツのスイッチを入れた。そのままコタツには入らずに、壁に隣接して置かれたピアノのイスに腰掛ける。20万円くらいのピアノだ。高校生の頃に、親に無理を言って買ってもらったのを未だに使っている。

ドの音を鳴らす。そのまま流れるように、2音高くし、次は半音落とす。考える前に指が次の鍵盤を抑える。足元のペダルも、感情

のままに踏む。楽譜は置いてあるが、見たことはない。せいぜい音目を確認するくらいだ。

大好きなアニメ映画の主題歌。壮大なオーケストラから、静かな音へ。それぞれの楽器の特性を活かしたソロパートに移行し、少しずつ全体が組み合わさっていく。それらが全て合致したとき、初めに壮大だと思っていたパートは、序幕にすぎないことがすぐに分かる。力強く、多彩で、大きな森や、海、空をイメージさせる。様々な生物の声が風に乗って大地へ降り注ぐ。そしてやがて風は大きな谷の間にもぐりこみ、そこに咲く小さな一輪の花を揺らす。花は一度、可憐にその身をくねらせると、控えめでいて、甘い香りを残す。やがてその香りは静かに消えていくのだ。

トオルはそんなことを想像しながら、ベースとなるピアノパートを弾く。

彼がピアノを真剣に始めたのは、中学に入ってからすぐの頃だった。実家は農家だったが、なぜかリビングにはピアノが置いてあり、それはいつもトオルの玩具だった。中学に入ったトオルは、家のピアノを毎日のように弾いていた。別にプロになろうとか、誰かに習おうなんて気はさらさらなかったし、両親もそのつもりは微塵もなかった。ただ、彼は人が歌を歌うように自然に頭の中のメロディをピアノで弾くことが出来た。それは彼の絶対音感という才能に起因するものであることは後になってから知った。聴いた曲をすぐに弾けることなど、皆出来ることだと思っていたくらいだからだ。

それが特異なことであると、大学生になってから知った。それで別段得をしたということはないが、ピアノが弾けるということを知った友人が、今のバンドの先輩を紹介してくれて、自然と曲を作り始めた。

いつしか彼は、バンド用の曲と自分のための曲を作りわけられるようになった。それが何かにつながるわけでもないが、いい加減、自分の曲を誰かが適当に我が物顔で歌うことには辟易していた。

しかし、彼はいつか自分の作ったこの曲が、自分のものとして、世に出て行く、そんな気がしていた。いや、正確にはそうでないといけないのだと思っていた。

## 「ケイ」フロートینگ1

突然携帯電話が鳴った。

「R社人事の高岡だけど、覚えてる？」

「ああ、高岡さん、突然どうしたんですか？」

「落としとして悪いんだけど、今度飲み会やることになったんだけど、お前、幹事やってくれないか」

「うーん、嫌です」

「うん、だろうな。幹事はもう既に他のヤツに頼んでるんだ」

「…高岡さん、変わらないですね」

「当たり前だろ、就活生じゃあるまいし、そう短期間では変わらないさ。変わる気もないしな」

「はあ。それで飲み会って何の飲み会ですか」

「聞きたい？」

「や、いいです」

「相変わらずだな。3月15日にやるからあけといて」

「それ、来週ですね。あ、でもあいてるな。わかりました」

「おう、よろしく」

とすぐに電話を切られた。なんか嵐のような人だな。ケイは口にくわえた歯ブラシを抜き、口内からあふれ出そうな泡を吐き出しに、洗面所へ向かった。

待ち合わせの時間は8時だったが、その少し前に着いた。そこには既に数人の男女がいる。見た目からすると、同年代かな。グレーのジャックЕТを着た男が、ケイを見て手を振る。それに気付き、周りにいた人もケイに目を向ける。とりあえず、そちらに寄つていくと、

「木本君も来るとは思わなかったよ。なんかこういう馴れ合いみたいの嫌いそうだし」

「ああ、まあ遠からず近からず。ところで、誰だっけ、見覚えあるけど」

「はは。確かに木本君と違って僕は目立たないからね。古川です。面接で一緒だったろ。あと、阿部君も来るんだよ。それに久居さんも同じだったの覚えてる？」

古川は、少し横にのいて振り返り、後ろにいた小さな女性に目をやる。

「久しぶり」

遠慮がち彼女はケイに頭を下げる。フリルのついたワンピースに、カーキ色のカーディガン。腕には、カラフルなミサンガみたいなものをつけている。

「ああ、髪が明るくなったからわからなかったよ、久しぶり」

「もう内々定もらったから、髪染めたの。似合う？」

「終わったからって髪染めるってのが安易だね。黒のがよかったかも」

あ、また本音言っちゃった。

大通りを走る車のヘッドライトが目飛び込んできて少し眩しい。目を細めると、苦笑する久居がいた。

「や、ほんと、嘘つくの苦手なんだよね、木本君は。面接の時もそうだったからさ、変わった人がいるなって思ってたんだよ。なんか自分を持つてるとのかな、憧れるよね」

フォローするように多くの言葉を発する阿部が道化師のように見える。端の方で見慣れない女性がケイを見ている。その視線には明らかに敵意が感じられる。真っ直ぐに降りた髪は、肩よりやや上で不安定に揺れる。ほとんど化粧をしていないように見えるが、綺麗な顔立ちをしている。プライドが高そうな上がった目じりと、白い肌が何より印象的だ。堅く結んだ唇が、突然開く。

「嘘が苦手ならしゃべらなさいい。デリカシーのかけらもないのね」

「下らないだろ。人に気を使って生きてくなんて。メリットが無い

なら、俺はそんなことしたくない、それだけだよ。それに嘘ついてまで友達を作ろうとするやつのがしれない」

あー、またやつちやたな。雰囲気悪い。もう帰りたいな。

「江美、やめなよ。本木君の言うことももつともだよ。別に悪口言ったわけじゃないんだから。ごめんね、本木君」

そう言つて、彼女を止めようと肩を抑えたのは、ロングの女性だった。大人しく目立たない顔だが、鼻筋は通っていて、何より真っ直ぐな目をしていた。

「別にあんたが悪いわけじゃないから、気を使うなよ。俺も少し言い過ぎた。ごめんな、久居」

久居は首を振つて、大丈夫、ありがとうと言って、なぜかガムをくれた。

「皆が騒いでるからでにくかつたんだか」

そう言つて、黒のロングコートを来た男が現れた。

「あ、阿部君」

古川は、ほつとしたように言つた。阿部はケイを一瞥すると、

「お前、ほんとトラブルメーカーな」

「ほつとけ。160センチにロングコートは似合わんから、やめとけ」

さっきの女性は未だに睨んでいる。そして隣では、気まずそうに彼女の肩を触る女がいる。

「高岡さんは少し遅れるらしいから先に店入ろう」

たむろしていた学生達は阿部に続いて歩いていく。

「古川君、さっきは悪かつたね、フォローしてもらつて」

道中、特に話すやつもいなかったたので、古川に声をかけた。

「や、いいんだよ。本木君が悪いわけじゃないし。フォローになつてなかったかもだけどw」

「まあ、なつてなかったな」

「ほんとストレートだねww」

「ところで、今回の飲み会の主旨つて知ってる？」

「え、聞いてないの？なんか高岡さんが面接した学生の近況報告兼ねてざつくばらんに飲もう、みたいな感じらしいよ。ああ、あそこの水木明日香ちゃんだけ、さっき揉めてた東江美ちゃんのルームメイトらしく社会人らしいけどね」

ふうん、水木明日香。しっかりしてそうだとは思ってたけど、年上だったのか。

相変わらずヘッドライトの明かりが眩しく目に入る。

## 「ケイ」フローティング2

「大体あーゆータイプって嫌いなんだよね」

と江美が言う。隣で聞いていた明日香は、いつものようになだめる。近くにいた阿部が、好奇心から質問をする。

「なんで嫌いなのか？面白いじゃん、アイツ」

店に続く階段を上りながら、江美は、阿部のほうを睨んだ。先ほどの怒りが収まらないと見える。

顔のまんま強気な子だな。阿部はそんな風に思いながら彼女の言葉を待つ。

「面接のときだって、私隣にいたけど、グループワークなのに、自分だけがしゃべって。声が大きいから丸聞こえよ。自分だけがアピールできればいいと思ってるのよ」

「はは、周りから見たらそう見えるんだ。まあ確かにアイツは声でかいし、意外によく喋る。それに自分の意思やポリシーみたいなものを強く持つてるから、我を通すように見えるけど、実際はそんなことないよ」

自動ドアが開き、店員が威勢よく声を出す。阿部は手際よく入店の手続きをすませ、皆を中へ入れる。座敷に通されると、とりあえず生ビールをピッチャーで注文し、いくつかウーロン茶も運ばれてきた。

「さっきの話、納得いかないんだけど。発表もアイツがしてたじゃん。アピール小僧だからでしょ」

男女が適当に座ったため、阿部の隣に来た江美が聞く。阿部はちらと周囲を見て、ケイが近くにいないのを確認して、

「あのときは、初めてグループワークしたヤツが多かったから、わざとアイツが喋ったんだよ。制限時間もあるしね、積極的にしゃべらない人はビジネスでは取り残されるんだから、それをわざわざ拾う必要はないって考えもあるらしいけど。それもグループワークで

は協調性が評価されるってことを知った上でやってるらしいし。それに、アイツには周囲を巻き込む天性の才能があるように思うよ」

「買いかぶりすぎじゃない？」

テーブルに置かれたピッチャーの結露をおしぼりで拭き、コップをビールで満たす。阿部がしきって乾杯をする。

「確かにアイツしかしゃべらなかつたけど、実は最終的な結論は、少しずつ出した皆の意見がまんべんなく反映されたものだったんだよ」

「でも、皆がもっと喋ってれば、もっといい結果が出てたかも」

「それはまあ、確かにそうかもしれないけど、あいつが想定してるのは面接じゃなくて、実際のビジネスシーンなんだよ。そういうやつなんだよ」

コップに注がれたビールに口をつけ、コップを置くと、江美は大きくため息をついて、

「はた迷惑なやつね、それ」

「まあ、でも結果的に、うちのグループメンバーは全員受かったんだよ。きつとアイツがいなきゃ、その結果はありえなかつたろうよ」

ケイがトイレから戻り、阿部の前に座る。江美はケイの顔をまじまじと眺め、フンと鼻を鳴らす。

「何、俺の悪口か」

「まあ、そんなところだよ。天才と馬鹿は紙一重って話だ。それよりバンドの話はどうなった？」

「バンド？何の話だっけ？」

ケイは革のジャケットを脱ぎながら聞いた。

「おい、お前が言い出したんだろ、バンドやろうって」

「ああ、そうだったか。じゃあやろう。何が弾ける？ギター？ドラム？」

「や、なんにも。歌うだけ」

「じゃやめにしよう」

ビールをぐいと飲み干した阿部は、

「結論早いな」

とつつこむ。江美の隣でそれを聞いていた明日香は、苦笑し、  
「ケイ君は何か楽器できるの？」

と聞いた。ケイは明日香の顔を見る。その表情はどこか、母性の  
ようなものを感じさせる落ち着いたものだ。隣に座る江美が妹  
のように見える。ニットのセーターは首を半分以上隠している。そ  
こからわずかに、赤い痣が見える。不意に浮かんだ言葉がすっと口  
から出る。

「キスマーク？」

店の照明は少し明るすぎた。長テーブルには3灯の照明があたり、  
木製のテーブルに過度の照り返しを見せている。BGMは90年代  
のポップスのように思うが、知っている曲は少ない。

「やだ、違うよ」

それ以上言い訳をしないのは、やましいことがないから、それと  
も、嘘がつけなかったから？

沈黙の中を古いメロディが通り抜ける。先ほどから江美は背中を  
壁につけ、もたれた体勢で、ビールを飲み続けている。

「何も弾けないよ。だからやるとしたら、ボーカルしかないから、  
阿部とじゃ組めないな」

沈黙の気まずさから、ケイは口を開いた。そして、ぬるいビール  
を飲む。ピッチャーの結露で、テーブルが少し濡れている。

「ギターとか友達にいないの？ピアノなら私、少しは出来るけど」  
「いないな。阿部は？」

「俺も右に同じ」

ピアノ、弾けるのか。まだアルコールの回っていない脳が、先ほ  
どの明日香の言葉を回想する。その瞬間、ふと思いついた。

「あ、いる。ギター弾けるやつ。ただ、そいつの名前、

セクシーKって言うんだ」

## 「ケイ」(スピンオフ1) セクシーク(前書き)

本編とはほぼ無関係ストーリーです。面倒な方は読み飛ばしても、まあまあ問題ないです。

## 「ケイ」（スピンオフ1）セクシーク

ケイが大学に入り、初めて話したのは、身長の高い傲慢な男だった。なぜ話しかけられたかも、なぜ一緒にいたのかもわからない。ただ、そりが合わずにそいつとはすぐに話さなくなった。

そいつと話さなくなつて、気付いたことがある。大学の入学当初というのはとても大事な時期でそれを逃すと、友人は出来ず、孤立してしまうということ。ケイは大学において完全に孤立していた。人見知りだったし、社交的でもなかった。

大学での沈黙は少しずつ、ケイの心を侵食し始める。

気付いた時、ケイは、中国人留学生の集団にまぎれていた。文化も価値観も大きく異なる集団。それに年齢も皆、年上だった。日本語学校を卒業して、大学に入学した者が大半だったからだ。

いつも6人くらいでいるのだが、その中の王という学生に、「読みは、オウなの？それともワン？」と訪ねたことがある。

彼は、人懐こい笑みを浮かべ、

「どっちでもいいよ。そんなの気にしないから」

と言った。しかしその直後の授業で、講師にワン君と呼ばれ、厳しい表情で、

「オウです。間違えないでください」

と拳手したのは驚いた。というか、俺のコーヒー返せww

夏になると、ケイの沈黙とは裏腹に、蝉は騒がしく鳴いた。王は額の汗を拭きながら、

「おいしそうだな、蝉」

と遠い目をしていた。ケイも同様に遠い目をして、もう、アカンと思った。

そんなときに、出会ったのが、吉野慶介だった。強い癖毛が傷んで、波打っており、いつも褪せたジーンパンを履いている。目は常にうつろで、口も半開き。ちょうどポストのような状態であった。岡

山訛りがきつく、やたらと顎をなでる癖のある男だった。彼は、「お前、なんか部活入っとるん」

と唐突にケイに訪ねた。ケイは、不信感を露骨に出して、「いや、それが何か」

と横目に答えた。

「…しかし、トムにとってそれはどうでもよいことでした。それを見たナンシーは…」

講師に和訳を求められた、女子は、すんなりとそれに応える。

「や、実は俺、準硬式野球部に所属してるんやけど、部員がおらのんよ。で、入ってくれんのんかな、と思って」

「あ、そう。普通、そういうのって野球経験とか聞くもんじゃないの？」

「ああ、すまん。でも、初心者でも全然問題ねえよ。初心者ばっかやもん、ゆうて」

和訳をしていた女子が着席する。半袖から出た、健康的な二の腕は、少しだけ汗ばんでいるように思う。

「横でしゃべってるから和訳間違えそうになったじゃん」

と急にこちらを見て、彼女は言う。開けっ放しの窓から風が入り、カーテンが大きく揺れる。そこから、中庭が見える。授業中なので、中庭は閑散としており、墓参りに行った時のことを思い出す。

「サーセン」

青い空と、古びた校舎を交互に見比べながらケイは言った。彼女は、冗談よ、と言って肩を叩く。慣れなれしいな、と思ったが、彼女の髪から香るリンスの匂いが、わずかに好意を煽る。

「実は私、その野球部のマネージャーなの」  
なるほど、そういうことか。

「それにしても、何で俺に声かけたの」

「なんか孤立してるし、部活とか入ってなさそうかなって」  
嘆息を漏らす。周囲からそういう目で見られてるんだな。

「じゃあ、今度見学に行くよ」

「ほんと、やった」

「おう、待つとるよ」

「その3人、うるさいわね。しばらく立ってなさい」

「サーセン」

相変わらず、カーテンは揺れている。中庭では、講義を抜けた学生が数人、バスケットボールを使って遊んでいる。

## 「ケイ」(スピンオフ2) セクシーク(前書き)

本編にはあまり関係ない話です。読み飛ばしていただいても、まあ問題ないです。

## 「ケイ」（スピンオフ2）セクシーク

ほどなくして、ケイは野球部に入部した。

部には、ケイと吉野、それ以外に同回生が二人いた。どちらもケイとは学部が違うので、結局、吉野とよく話すようになった。

吉野は、決して二枚目ではない。端的に言うと、不細工である。しかし、正確も独りよがりで、勝手である。そう、つまりいいところなしであった。本来、続くべき、「しかし性格はよく」というものないのである。

ケイは既に自分が危機的状況に立たされていることを気付いていた。「吉野君てなんだか暗くて何考えてるかわかんないよね」

「ていうか、変態ぽくない、目つきやばいでしょ」

「肌とか汚すぎだし、生理的に無理」

女子の評判は大方このようなものであった。唯一、彼のいいところと言えば、鈍感なところであった。

彼は、あらゆる悪評に気付いていなかったのだ。そして、彼はあの時、言った。

「俺、バンドやることになってん」

衝撃が走る。ひきつった顔で「おお」と答えるのが精一杯だった。「昔からバンドでギターやってたんやけど、先輩から誘われてな。しょうがねえからやる言うたった」

なぜ上から。

「バンドしてたのか、知らなかったよ。で、入るバンドはなんて名前？」

ケイは鉛筆をクルクルと回しながら、聞く。吉野は机の下で、携帯電話をもぞもぞと触りながら、少しにやついて、画面を見せる。そこには、『多血羽名』と書かれていた。

「ん、なんて読むんだ？」

「タチバナ」

「…ん、ああそうか」

「へへ」

もうだめだ。もっとポップな感じかと思っていたが、どうやらヘビーマタルのようだ。

「もう、HPに名前載せられとるんよ」

吉野は、嬉しそうに言う。回していた鉛筆が落ちて、コッソンという音を立てる。

「これ、見て」

再度向けられた画面には、彼の写真と、『セクシーク』という文字。

「うん、もう帰れww」

夕暮れが近づき、カラスが赤い空を飛ぶ。雲はゆっくりとその黒い影を移動させる。

何とかしなければならぬ。ケイは焦っていた。中国人から変態へと渡り鳥のように旅をしていたが、何とかして安住の地を探さなくてはならない。大学から出る、長い下り坂で、突然、肩を叩かれた。振り向くと、そこに立っていたのは、坊主頭に、ダボダボのジーンズを履いた男だった。

「自分、ツツコミの才能ありそうやな」

「な、誰？」

よく見ると、目の下には深いクマがある。

「山縣で言うんやけど。山縣の『ガタ』は一生懸命の懸から心を抜いた字」

そう言っで、にかつと笑う。大きな肩幅で、夕日が隠れている。

「漫才の相方探してんねやけど、一緒にやらへん」

「はあ」

山縣はまたにかつと笑った。不思議の国のアリスに出てくる猫はきつとこんな表情で笑っていたんだろう。彼のニットセーターには、大きく『YES, I LOVE』と書いてある。

「めっちゃおもしろいやる、このセーター」  
「いや、だせえよ、限りなくww」  
駅までの道が今までで一番短く感じた。

### 「ケイ」フローティング3

橙色の照明が安っぽさを助長する。店内には、サラリーマンが多く、笑い声や、仕事の話が充満している。その姿と、自分達の就職活動が上手く結びつかないのは何故だろう。

「セクシーク。それって何、あだ名」

ほとんど坊主に見える頭を触りながら、阿部が言う。

「まあ、あだ名というか、バンドネームみたいなもんなんだろ。何にせよヒヤンルがヘビメタだから、雰囲気合わないしな」

腕を頭の後ろに組み、壁にもたれかかろうとして、後方に壁がないことに気付く。すぐに手について、後ろに反った体を支える。

「どんなバンドがやりたいの？」

柔らかく、耳障りのいい声で、明日香は聞く。やや下がった目じりからは母性が溢れているように見える。

「やるなら、ポップなのがいいな。軽いのは性に合わないけど、メロディを重視した音楽をやりたい。ミスチルとかスキマスイッチとかが近いけど、世界観はイエモンって感じかな。わかんないか」

「おお、わからないなwww。俺は、ハモリ中心のボーカルグループを作りたいんだが」

「似合わないな。お前、珍念さんに似てるぞ、顔が」

「珍念さん……」

明日香は、阿部の方を見て、笑いを堪える。阿部がそれに気付く。「待て、珍念さんでどんな顔だ、イマイチわからないが、なんか嫌だな」

堪えきれず、明日香もケイも笑う。彼女は、笑うと、急に子供っぽくなる。肩がわずかに揺れ、その丸みが目に入り、触れたい衝動に駆られる。

ケイは「概ねそんな印象だよ、俺も」と言い、また笑った。

「では、宴もたけなわということで、一本締めでしめさせていただきたいと思います」

アルコールのせいで、すっかり視界が狭くなっている。今日はずっと明日香の方を見ていた気がする。そして、隣でちらちらと睨む、江美の姿も必然的に視界に入る。わずかに、だが。

阿部の掛け声と、慣れなく一本締めで宴は終わった。それぞれ鞆とコートを、牛が草を食べるときのようにのろのろと拾い上げ、店を出る。阿部とケイは残って、忘れ物がないかを確認する。空になった煙草の箱、使われたお絞り、食べ残した刺身。それらをざっと見て、がさつな泥棒が入ったりリビングが頭に浮かぶ。

江美が座っていた場所に、緑とピンク、白の3色が複雑に混じったデザインのマフラーが、無造作に落ちている。

「こっちは何もないよ」

阿部がコートのボタンを止めながら言う。ケイは、マフラーを阿部に見せ、「さっきの口の悪い女の忘れ物」と言い、腕にかけると店を出た。

二人が店を出ると、学生達はまちまちに話しをしながらも、二人を待っていた。

「あんた、マフラー」

そう言っただけケイはマフラーを江美に差し出す。阿部が皆を駅の方へ誘導する。明日香もその最後尾に着く。

「あ、ありがとう」

江美はそう言っただけ、素直にそれを受け取り、首に巻き、

「明日香は、ダメだからね」

そう言っただけ、ケイの胸を人差し指で強く押した。

「あ、そ」

少し早足に、二人は集団の方に近づく。

「明日香は優しいから、いつも男に傷付けられる。だから私が守るの。それに今は彼だっているし、ちょっと優柔不断な人だけだ」

空に星は無い。無理もないか、都心部の明かりはいつもまぶし過

ぎる。滲むネオンサインと、金融機関のビルボードがやたらと目立つ。

ケイは先ほどの店でこっそり聞いた、明日香の連絡先をメモした紙をポケットの中で探し、強く握った。

江美は明日香の腕に自分の腕をからませる。可愛らしい女の子のシルエットが林檎を想起させる。吐く息が白く、真つ暗な夜空に向かって登っていく。

「ダメなのはお互い様だよな、俺も彼女がいるんだし」

阿部が振り向いて、追いついて来い、というジェスチャーをする。僕はそんなに急いで、どこに向かっていているんだろう。

## 「ダイ」ブランドニュー・マイラバー

すっかりコーラは無くなってしまい、コップの中で氷がからからと音を立てる。書きかけのエントリーシート。消しゴムのカスを端に押しやる。

食べ終わったハンバーガーの包みの乗ったトレイを処理するために、一度、席を立ち、また戻ってくる。もう何度も自己PRを書いた。隣で女子高生二人が向かい合って、携帯電話でメールを打っている。その指を止めたかと思うと、ポテトに手を伸ばして、またパチパチとやる。

ダイはボールペンを何度もノックし、ペン先を出し入れた。今回は、バンドのことを書くこうか、それとも、大学で研究している心理学の話を書くこうか。広告制作会社の割りに、専用ホームページもなく、パンフレットも無い。決して小さな会社というわけではない。むしろ業界内では大手と言っている。情報が無さ過ぎるのだ。

ジーパンに入っていた携帯電話が鳴った。

「もしもし」

「ごめん、今着いたよ。どこにいる？」

「今、駅前に行くよ。そこにいてくれる」

「うん、わかった」

携帯電話をポケットに戻すと、エントリーシートと筆記用具をリュックに詰めて、店を出る。駅に行くと、彼女は赤い革の鞆を両手で持って待っていた。

「ごめんね、寝坊」

「いや、ちょうどエントリーシート書きたかったから、よかったよ」

「ほんと？」

「うん」

ダイは首を振る。ちょっとしたつむじ風が起きる。

彼女はフリルのスカートがめくれるのを抑えて、「どこ行く？」

と言った。薄手のタートルセーターに、ベスト。上からキャメル色の革ジャケットを羽織っている。スカートからのぞく、脚が寒そうだ。

「寒くない？」

「うん、大丈夫。女の子だからね」

「そっか」

ダイは彼女を連れて、歩き始めた。高架下をしばらく歩き、程なくして小さな居酒屋に入る。

「もつといい雰囲気のお店の方がよかったかな」

「うんうん、全然いいよ。高いお店って落ち着かないし」

「そっか、よかった。ここのささが上手いんだよ」

「じゃあ、それ頼もっか」

彼女は苦笑する。

「とりあえず、生頼もっか。すいません、生二つ」

「ね、ダイちゃん、就職活動はどう？」

彼女は身を乗り出して聞く。

「うーん、まあ、ぼちぼちな」

「そう」

「そっちは？」

「うーん、今、決まりそうなところがあるんだ、メーカーなんだけど。人事の人が凄く優しくて、でもあんまりお給料もよくないし、まだ創業してそんなに年数経ってないから、ほとんどベンチャーみたいな感じなんだよね」

「そっか。まあでも薫が行きたいと思ってるんやったら、いいんじゃない」

店員が生ビールを運んでくる。ジョッキが机に当たり、鈍い音を立てた。

「ダイちゃん、最近、気になる人とかいる？」

ジョッキを持って、小さく乾杯をする。

「うーん、別に」

ダイはわずかに目を細める。彼女は、ビールを3分の1ほど飲み干して、「やっぱりビールはおいしいね」と言って、勢いよくジョッキを置いた。会話が止まる。周囲の会話やBGMがよく聞こえる。彼女はテーブルの1点を見ながら、

「最近よくメールしてるよね」

「ああ、ライブも最近は多いしな」

「そっか」

「うん」

気まずい空気を嫌い、ダイはジョッキを頻繁に口に運び、ビールを流し込む。味はしない。テーブルには突き出しの枝豆が運ばれる。パウチで止められたメニューを見て、慌てて注文をする。

「私、今、気になる人いるの」

「へえ、つてえ!？」

「驚くよね。なんか久々の感覚で、新鮮だったよ、私にしても」

「いや、そういうことじゃなくてさ、誰？」

「就職活動で会った人。ダンスずっとやってたらしいんだけどさ、ほら、私もダンスやってるじゃん。なんか話合っちゃってさ。たまに食事とか行ってる。でも、向こうは彼女いるしさ。実らないんだけどね。一緒にいられるだけでいいや、なんて思っちゃってて」

「そっか。なんか、どう言っているのかよくわからないな」

「うん、それで正直、もうダイちゃんに心が無いなって。よく考えたら、情みたくないものがあるだけで、もうお互いに一緒にいる意味はないように思うの」

「勝手だな」

「そうかな。ダイちゃんだって、気になる人、いるんでしょ。そういうの、分かるんだよ」

「いや、まあ、なんかさ、それは今、関係ないじゃん」

「あるよ。最近、いつも上の空だし、優しいふりしてるだけで、心配なんてしてくれてないの、分かるし」

彼女は少し涙を浮かべた。慌てて、おしぼりを渡す。

「俺が泣かしてるみたいだから、とにかく、あんまり大声出すなよ」  
「最後まで、自分のことしか考えてないね」

「いや、そういうわけじゃないけど。まあ、別れるってもう決めたなら、仕方ないな」

「止めないんだね」

「止めても仕方ないんだろ」

「なんか、なんか、違うよ。やっぱり私とダイちゃんの間には、もう恋愛感情なんてないんだね」

「いや、あると思うよ…」

そう言つて、ダイが自分の言葉が排気口に吸い込まれていくのが見える気がした。ある意味ではいいタイミングだったのかもしれない。確かに、就職活動で出会った女の子とたまに遊びに行つて、良好な関係を築いている。付き合いたいとも思っている。おそらく、向こうも同じ気持ちだろう。

「さよなら」

彼女は赤い鞆を持つて、そのまま店を出て行つた。追いかけたら、無銭飲食で捕まるのかな。

店にぽつりと残つたダイを他の客がちらちらと見る。しばらくは平静を装っていたが、「可愛そう」という単語が耳に入ってきたとき、ダイは勘定を済ませ、料理を残して店を出た。テーブルには、手のつけられていない料理と、半分以上残つた生ビールが残つた。

ダイは高架下を急ぎ足で駅に向かう。新しいバッシュが確かに地面を蹴る。その時考えていたのは、新しい女の子のことと、

「ええ歌書けそうやわ」

ということだけだった。

## 「トオル」ムーンプソデー

「売れないな」

人の部屋で煙草をくわえた先輩は呟いた。

「まあ、ぼちぼちですね」

煙草の先端で揺れる赤い火を見て、トオルは言った。

先輩帰ったら、フアブリーズしよ。てか、いつまでいるんだろ。

「うちのバンドの何がダメなのかね」

大きく煙を吐き出す。新曲の打ち合わせをしたいと言って、部屋に来てからずっとこの調子だ。トオルは、ベッドに置いた携帯電話が光ってるのを見ると、先輩に断わり電話に出た。

「ああ、今はちよつと。またかけ直すよ」

ぼさぼさの髪を触りながら、携帯電話をまたベッドに投げ、こたつに足をつっこむ。灰皿に溜まった灰を上手く避けながら、先輩は煙草を押し付け、火を消した。

「お前はいいよな。才能もあるし、彼女もいる。それにまだ若い。楽しくって仕方ないだろ。俺は27でフリーター。売れないバンドマンだ」

顎にはえたわずかな髭を触って先輩は言った。

「そんなでもないですよ。最近是她女と会ってても楽しくないし、それに俺はバンドだってやってないし」

「なに、お前彼女と会ってて楽しくないわけ」

「まあ、マンネリってわけでもないですが、もう3年も一緒だと、ドキドキしたりとかの新鮮さは無くなってますね」

「3年か」

そう言って先輩はセブンスターのソフトケースからまた1本煙草を抜き出す。

「先輩、煙草、やめた方がいいですよ、体にも悪いし、声にも」

「皆吸ってるんだし、そんな問題じゃねーよ、俺らが売れないのは」

机の上に落ちていた髪を拾い上げ、ごみ箱に捨てる。トオルは冷蔵庫からサイダーを出してきて、グラスに注ぎ、口をつけた。静かな部屋に炭酸の泡がはじける音が鳴る。

「窓、開けていいですか」

先輩が小さくうなずいたので、トオルは窓を開ける。乾いた風が部屋に吹き込み、コタツに置いたコード表がパラパラとカーペットに落ちた。

トオルはそれを丁寧に拾い上げると、ギターを持ってベッドに座った。先輩は猫背になって、顎をコタツのテーブルに乗つけて、煙をぷかぷかと吐いている。メジャーコード中心の軽い音が鳴る。それに合わせて小さな声で歌う。

背伸びして いつもバランスくずしてしまいそうになるけど  
それでも走っていいこう 青い空はどこまでも続くよ

「BLUE SKY MELODY」

灰皿に煙草を押し付けると、コップに入ったサイダーをかけ、火を消した。小さな音がなつて、か細い煙が天井に向かう。ゆらゆらと揺れながら、少しずつ薄くなつて、それはやがて消えた。

「お前らしい曲だな」

「いい出来だと思えますよ、自分でも」

それは嘘ではなかった。ここ最近では最も気に入った曲である。本来、バンド用にはしなくなかったが、このままバンドが売れないと解散もあり得る。何だかんだ言ったところで、音楽を公表する機会は今のところバンド以外には無いのだ。

「いい曲だ。ライブで歌ってみたかったな」

コタツから出て立ち上がった先輩はこちらを見ずに、言った。

「え？」

「解散することにしたんだよ、今日はそれを言いに来たんだ」

「え、え？」

「お前には色々と協力してもらったのに、悪かったな」

「え、マジですか」

「お前は音楽続けるよ」

「え、なに、感動的な感じになっちゃってるんですか」

「ほんと、悪かったな。そんじゃあ帰るわ。また、飯でも食いに行こうぜ」

そう言つて、彼は部屋を出て行った。トオルはギターを膝にのせたまま、目を丸くしていた。風はすっかりやんで、カーテンは気持ちよさそうに揺れている。部屋の電灯が、瞬いて、消えた。

トオルはしばらく動けなかった。

何分くらいそうしていたろう、思い出したように、

「電球買いに行かなきゃ」

とつぶやいて、パーカーを着込み、部屋を出た。外はもう暗くなっており、空を見上げると、輪郭の曖昧な三日月と目が合った気がした。

## イントロデューズミィ1

これが3個目の内々定だ。

おそらく30階はある高層ビルのトイレ。鏡の前に立ち、ネクタイを正しながら、ケイはそう思う。清潔感を出すために、きちつと分けた前髪をもう一度触り、斜めに流す。ネットの情報で、この企業の最終面接は、挨拶程度の意味合いしかなく、既に受かっているも同然だということを知っていたため、ケイにはかなり余裕があった。落ち着いているのには、もう一つ理由がある。それは激務薄給という評判のこの企業に入る気などさらさら無かったからだ。

ピンクのネクタイにチェックのシャツ。それにグレーのスーツを着ている。本来、就職活動では、無地のシャツに、青とか赤のネクタイを使用する。グレーのスーツもかなり珍しい。

受付を済ませると、待合室へと招かれる。会釈をし、部屋に入ると3名の女性がいるだけで他はまだ来ていない。大人しく指示された席に座り待っていると、隣に男が座る。男は、ケイの方を見て、「あつ」と短い言葉を発した。ケイは彼の姿を注意深く見た。アシンメトリの髪に、低い鼻。うん、全然覚えが無いぞ。

「あ、ああ」

と愛想笑いをしたケイに、男は、

「あれ、覚えてない感じ？この前のグループワークで一緒だったじゃん」

と肩を叩く。

「そうだった？」

とケイは首を傾げる。後ろの扉が開き、女性が入ってきた。今度は見覚えがある。向こうもケイに気付き、後ろに座った。

「ね、彼覚えてる？グループワーク一緒だったらしいんだけど」

彼女はケイの問いかけで初めて、男の方を見て、

「覚えてない」

と首をかしげる。ケイは冗談半分に、

「なんだったら、いなかっただんじやない」

と言うと、男は焦って、

「いたよ。ダイって覚えてない」

と二人の顔を交互に見る。二人とも同時に首をかしげ、

「いたかな」

と困惑した。ダイは話の矛先を変えようと、

「ところで、この会社って、ここまで来たら、全員内々定なんだろ。それにしても数多くないか。例年だと20人程度のはずだぞ」

確かに気付くと、待合室には既に20名程度の学生が緊張感を持って座っている。それに先ほど見た名簿リストには少なくとも50名程度の名前があった。

「確かに変だな。まあでも大丈夫だろう」

とケイはイスに深く腰掛けた。後ろで、女も、

「深読みしすぎじゃない」

と言う。鞆の中からノートを取り出しながら、ダイのこの不安も妥当なものであるとケイは考えていた。当然、例年20名しか採用しない企業の面接に50名が来たら、半分は落とされる。今年は売り手市場と呼ばれ、採用枠が広がっているにしても、2倍や3倍になるだろうか。

もし、内々定が一つも出ていなかったら、もしこの企業を強く志望していれば、不安で仕方ないだろう。

待合室では、ダイの不安が感染したように一様にこの話題が溢れる。しかし社員には決して聞かれない話題だけに、下水で蠢くねずみのように静かに、しかし多くの言葉が交わされていた。

ケイはすっかりうんざりしてしまい、少し眠ろうとさえ考えていた。

「はい、では今からよばれた人は隣の面接室に入ってください」

スーツを着た社員がはっきりとした声で言う。死刑執行人が現れたかのような、異様な緊張が走る。

「犬飼君、重田君、白井君、藤吉君、松木君」

呼ばれた5名は、社員の後に付き、隣の部屋に入るよう指示される。扉を開けると、大きな部屋に、役員が5名座っている。そしてそれと向かい合うように、不安げにイスが5脚並んでいる。5名はそれぞれ順に座らされる。ケイは向かって左端に座ることとなった。中央に座った役員が、

「初めまして」

と低い声で言う。

「ようこそ、わが社へ」

重苦しい空気に、一瞬、不確定な安堵感が立ちこめる。

「安心していいよ、もう皆さんには内々定を与えています。既に書類も作成しているので、帰りにもらっていつてください」

それぞれに胸を撫で下ろす。ケイは興味無さそうに役員の持つている書類を見ていた。

「では、我々の紹介をしましょう」

と役員の紹介が始まる。そしてそれが終わると、「では、皆さんにも自己紹介を簡単にでもいいのでしてもらいましょう、では君から」と役員は、犬飼の方を指す。

ケイは左端で今にも眠ってしまいそうな役員を見つめながら、何を言おうかと考えていた。どうせ、受かってるんだし、いつもと同じことは言いたくないしな。

役員の後ろには大きな窓がある。そこから街が小さく見える。

犬飼の自己紹介が始まった。

## イントロデューズミィ2

犬飼は、ボサボサの頭に、メガネをかけている。大学院卒で現在は、25歳らしいが30代でも通りそうなほど、老けて見え、スーツに出来た皺も、疲れたサラリーマンを想起させるものがある。

彼は大学時代に黄砂の研究をしており、モンゴルに渡っているそうだ。そこでの経験をどこか自身なさげに語る。語尾が少し揺れ、細かく汗を拭う姿が印象的だ。その態度とは裏腹に彼の話は興味深く、役員の目を引いた様子であった。

続いて、重田の自己紹介が始まる。垂れ目としまりのない口からは想像つかないが、ダンスコンテストで全国2位という実績を誇るパフォーマーだという。背筋を伸ばし、緊張感を持ったスピーチを行う。

順に流れ、ダイの自己紹介が始まる。

「私は、大学時代にずっとバンド活動をしており、最後のライブでは30名以上のお客さんの前でライブをしました」

膝に置かれた拳は強く握られている。役員が少し間を置いて、

「全員、友人とかじゃないの？」

と冗談交じりに質問した。ダイは、少し首を揺らし、苦笑いを浮かべ、

「いいえ、友人は一人も呼んでいませんから」

ときつぱりと返した。役員も「ん、なるほど」と短いあいづちを打ち、「では次に藤吉君」とトオルに話をうながした。ケイは、次に自分がする自己紹介の内容をまだ決めかねていた。気付けば隣にあるトオルが自己紹介を始める。

「私は、学生時代、ボランティアをしていました。その活動で全国に行き、家を建てるのを手伝ったりしていました」

「ほう、家をね、大工さんみたいに？」

役員は手元の資料に目を落としながらたずねる。ケイは、周囲の

自己紹介が派手なため、何を言えいいのだろうか、と考え、額に汗が滲む。隣にで、タオルが役員と会話をしている。

「では、次は松木君」

とついにケイに順番が回ってきた。

「あー… っと、僕は今まで話されてきた皆さんのように学生時代に何かした、という経験はありません。でも、何もしてなくても、今、そんな皆さん方と同じ土俵に立っていることを考えると、きっと何かいいものを持ってるんじゃないかな」

と言い切り、ケイはにこりと笑う。ほどなくして、役員の一人が笑い、端ですっかり寝息を立てていた役員が、

「お前、大丈夫か」

と言い、大声で笑った。それに感化されるように皆一斉に笑う。

「まったく、今年の学生は変わったのが多いな」

と中央の役員が、口ひげを撫でる。

「さて、では皆さんと来年の4月に会えるよう楽しみにしているよ」と言つて、今度は薄くなった頭を触った。後方で立っていた社員が、小さな声で部屋を出るよう誘導する。ケイを含めた学生たちは、何度か頭を下げ、部屋を出た。冒頭に役員が言っていたように、内々定に関する書類を渡され、5人はビルを出た。

「お前、ライブのお客さん全員友人だろ」

とケイはダイに言った。

「あ、ばれてた？」

「しょうもない嘘つくなよ」

と背を叩く。

「でも、受かっててよかったよ。他に行くところも無いし、承諾書もう出していいのかな」

大きな川の上を端がわたっている。コンクリートで出来た橋の手すりを触りながら、重田が言った。それに呼応するように、数名が「そつだな」と言う。ケイは慌てて、

「皆、他に選択肢ないの？俺、あんまり入る気無いんだけど」

と言う。前を歩いていた重田は、驚いて振り返り、

「いや、この時期まで就職活動しててあんないい企業受かったら、迷わないだろ」

とケイに言う。知らない間に季節は過ぎて、すっかり暖かくなっている。車道を走るトラックの排気ガスが宙に昇る。5人は横に広がらずぎっていたので、犬飼は歩道から降りて、ふらふらと歩く。

トオルは端から見える汚れた川を眺め、そこを漂う工業用の船を見つめる。船は波の無い水面をゆっくりと進んでいく。犬飼が、

「時間あるなら、飯でも食べて帰ろうか」

とまるで空気にでも言うようにぼんやりと口走る。皆、それに賛同する。まるで宙に浮かんだシャボン玉のように、不規則で自由に、風に吹かれるがままに存在する、その何かは、6月の柔らかな日差しに反射し、七色に輝いた。

## マイデシジョン

1つ目の内々定はすぐに出た。それは2月の終わりだった。志望していた広告業界の中堅レベルの企業で、かなり早期の内々定だった。就職活動において、内々定が出ているのと同じではないのとは、天地の差がある。それは精神的にそうであるほか、面接において内々定の数を聞かれ、それが選考基準の一つの参考基準になることもあるからだ。そういった意味では、ケイは順調に進めていたということになる。

しかしそれ以降、いいところまでは行っても、内々定が取れない状態が続いた。その一つの要因として、ある面接官に指摘されたことがある。それは、ケイのモチベーションの問題だった。

就職活動を始めた時、多くの学生は何か内々定を取りたいという気持ちで、積極的な活動をする。しかし、その活動を続けていく内、自分が何を求めて仕事を探すのか、を考え始める。ケイのように広告業界を受けている学生の多くは、休みが無くても仕事にやりがいをも、と思う。しかし、働くということを現実的に考え始めると、当然休みは必要だと思うようになる。これは決して悪いことではない。理想と現実の折り合いをつけなければいけない時期にさしかかっているだけのことである。

特にケイの場合は、最終的に60社の面接を受けるなど、散弾銃的な方法を取ったために、一つひとつの企業への思い入れは弱くなっていた。最終面接までは、言葉で誤魔化せるが、役員の目は誤魔化せない。ケイはまるで課題をこなすように面接を受け続けていた。そんな中、4月に2つ目の内々定をもらう。社員数10名程度のベンチャー企業だが、ケイを高く評価し、「君1名だけでも入ってくれば今年の採用活動は成功だ」と言った。それが嘘でもケイにとっては嬉しかったし、仕事内容も悪いものではなかった。ケイが通っていた大学は商科系だったので、財務諸表を見たが、健全な経

営を行っているように見える。結局、両親の強い反対にあい、内々定を断わった。

この時、決して彼は親をうらんだりしなかった。実際、彼にも社員数10名の会社に対する不安があり、親の反対を押し切るほどの意思は無かったのだ。

結局、ケイは6月まで就職活動を続けることとなる。もし、6月まで続けて、どこも受からなければ、一つ目の内々定をもらった企業に就職しようと考えた。6月になり、残ったのは2社。新聞中心の広告大手A社と、イベント中心の広告制作会社BUZZ。

A社は最終面接まで至っており、BUZZは先日内々定をもらったところだ。内々定の承諾期限は迫っていた。

「こっちこっち」

手を振る小柄な女性が見える。

「ああ、すぐに分からなかったよ、私服で化粧してると分からないもんだね」

ケイは席に着くなり言った。小さな喫茶店の中にはコーヒーの香ばしい匂いが溢れている。ホットコーヒーを注文して、辺りを見回す。大きなプロペラが天井でくると回っている。赤ん坊のベツドにつける玩具のように見える。カウンターにはコーヒー豆が飾られている。こげ茶色の豆は、ふつくらとしており、見ているだけで口の中にコーヒーの味が浮かぶ。

「悪いね、呼び出して」

ウェ이터が運んできたコーヒーカップを口に当てたまま、ケイは言った。女は首を振って笑顔を見せる。

「いいのいいの。ここところ、ずっと就職活動ばかりでしょ。息がつまっちゃって。たまには気を抜きたいの。それにケイ君の近況も聞きたかったし」

彼女は、首に巻いたストールを手で触り、遊ぶ。低い鼻に、薄い唇。真っ直ぐな髪は、ショートで前髪を眉の上までで止めている。

「近況ってことも無いけど、1つ、内々定をもらったんだ」

「え、前に言っただとところ？おめでとう」

アイスラテをかき混ぜながら、彼女は言う。彼女とは、A社の3次面接で会って、それから少し喋った仲だ。最終面接前に、6名ほどが呼ばれ、その中にいた彼女に話しかけて連絡先を交換した。そこにいた6名から、4名に内々定を出すという話を聞かされた。

「ああ、そこだよ。BUZZ社」

「あそこって結構有名だよ。どんな感じだった？」

「よかったよ。役員も優しそうだったし。よく言う、激務薄給って雰囲気は無かったかな」

「そうなんだ」

氷が溶けて、カラと音を立てる。ケイはコーヒークップにつっこんだままのスプーンを取り出して、皿に置いた。

「アヤちゃんはどうだった？」

ガラス張りの店内からは、歩道を歩く人々の姿と、その後ろに見える大型の電気店が見える。その横には1000台は入りそうな駐車場と、忙しそうに走る自動車も見えている。横断歩道を小走りに走る女性が、手に持っていた鞆を落とす。それを拾う者はいない。ケイはそれを見ながら、拾いにいこうかと考えるが、そんなことを考える前に、女性は鞆を拾い、走っていく。ヴィトンだったように思うが、角が地面に当たっていたので、傷が付いていないかと空虚な心配をする。

目の前に座っている女は、ぎこちない微笑みを浮かべながら、身振り手振りを交えて話している。その声は耳から入って、そのまま出て行く。ミスターチルドレンの『光の射す方へ』を思い出し、唇を動かす。

その日は、店を出て、彼女の買い物に付き合い、別れた。A社で会った6名の内、気が合いそうだったのは、今日会った彼女だけだ。それでも一緒にいて楽しいというほどではない。

帰りに公園の横を通る。公園では夕焼けの中、母親と子供が遊んでいるシルエットが見える。子供は、ストローのようなものをくわ

えて、上を向く。ジャムを塗ったように赤い空に、球体が浮かぶ。  
ケイは立ち止まって、その球体を見た。シャボン玉は不安定に浮  
かんで赤と混じった。

赤い 赤い 目にしみるよ  
僕の命を燃やして

彼は声に出して言った。子供は無邪気にはしゃぐ。シャボン玉は  
すっかり見えなくなった。ケイの体は夕焼けに染められたように、  
静かだった。

どこに行くかを決めた。それは彼の人生において、大きな決断で  
あるようにも、そうでないようにも思える。結局のところ、どうだ  
っていいんだ。

ケイはまた歩き出した。薄いソールから地面の感覚が伝わってく  
る。シャボン玉は子供によってまた作られ、空に浮かぶ。次々と空  
に浮かべられるシャボン玉を、ケイは振り返って見ようとは思わな  
かった。

## スターダスト

B U Z Z に承諾書を出した日、最終面接で会った4人にメールを送った。皆一様に「そうだと思った」という返信をしてきた。自分の中では、色々と悩んだ結果だったが、既にそのときには無意識に決めていたのだろう。2月に内々定をくれた会社には断わりの電話をした。6月末、ケイはこうしてスーツを脱いだ。

自分の中でもややもやしているものを全て吐き出してしまおうと思い、大学の友人である山縣と富士山を目指すことにした。山縣の実家がある兵庫県に行き、そこで自転車を買って、出発する。

出発の朝、母親が心配しているのを見て、「大丈夫」とだけ言った。兵庫県から富士山までは、約600キロ。なぜ富士山かと聞かれると明確な理由はない。ただ、日本一高い山に登りたかっただけだと思う。

5日間かけて富士山へ行き、ご来光を眺めた。下山して自転車を郵送し、バスに乗って帰った。

トオルからメールが来たのは、富士山から帰ってきて1週間後のことだった。

「流星群が見られるらしいから、見に行こう」

とだけ入っていた。兵庫県養父市で見た空一面の星を思い出して、「構わないよ」と連絡した。ケイは薄手のパーカーを羽織って、トオルが一人暮らしするアパートの近くまで来た。白の軽自動車に来て、ケイはそれに乗り込む。中には、最終面接の待合室で一緒だった女の子がいた。

「あ、と…」

「片桐」

彼女は自分の名前を、無造作に口にした。トオルが前方に視線を集中させたままで、話し始める。

「今日、星見ようって言い出したのは片桐なんだよ。二人きりで行くわけにもいかないからケイを誘ったんだ」

助手席に座る片桐がうなづくのが、後部座席から見える。

「何で片桐は星を見ようと思ったの？」

ケイは鞆からガムを出しながらたずねた。車は赤信号で止まる。

止まった拍子にケイの鞆から携帯電話が落ち、慌ててそれを拾った。

「んー、何となく」

携帯電話を開けて、壊れていないことを確かめる。トオルはウィンカーを出し、右折した。

「どこに行くか決めてるの？」

片桐がトオルの方を向き、聞く。明るい茶の髪が大きく揺れる。女性特有の香りはしない。トオルはフロントのミラー越しにこちらを見て、

「そこに山があるから、あそこなら星もよく見えるんじゃないかと思う」

運転席に寄りかかり、

「へー、ちゃんと考えてんだ」

とケイが言くと、トオルは口をへの字に曲げ、少し考えてから

「まあ…多分」

と首を傾げる。

山に入ると、ヘッドライトが木々を赤々と照らす。道には砂利が多く、ざらざらと乾いた音をさせながら車は進む。時々、電柱と複数の電線のようなものが見える。それは暗い夜の中で一際黒く見え、悪魔の流した血のようにさえ感じられた。辺りは静かだった。時々蛙の鳴き声が聞こえ、それに鳥の声が加わる。それ以外は静寂だ。少しずつ自分が自分でないような感覚に襲われる。一人でこんな所を歩いていたら、それこそ、知らない間に死んでしまいそうなくらいだ。

ある程度、山を登りきってしまうと、少しずつ下りの道が多くなる。

「そろそろ車止めた方がいいんじゃないか。頂上に近い方が星は見やすいだろ」

ケイの言葉にトオルは、「そうだな」と短く返答し、車を止めた。エンジンを切り、ライトを消した途端に、何も見えなくなった。片桐の「キャッ」という悲鳴の後、すぐにトオルはまたライトをつけた。

「ライトはつけたままの方がよさそうだな」

3人は車から出て、空を見上げる。小さな白い点が見える。それらは空にあげられた無数の穴のように見え、そこから、宇宙のもつと向こうが見えそうだった。

トオルは今来た道と、その逆を見た。どちらも、ただ道が続いているだけに過ぎない。その両端には薄くなった白い線がある。

「向こうにキャンプ場みたいなものがあるぞ」

車道とはそれた方向を指しながらケイが言った。片桐が「行つてみよう」と言い、皆それに従った。星は様々なところで瞬いている。キャンプ場に入るのに、三人は腰くらいまでの低い柵を越えた。

「これは不法侵入なんだろうな」

とトオルが言うと、ケイが、

「ここに、『夜間の無断進入は禁止です』と書かれてる。つまりはそういうことだ」

と柵の横にかけられた看板を携帯電話で照らして言った。

キャンプ場には、ただスペースがあるだけで他に何も無かった。

ただ、安い駐車場のように砂利が敷き詰められており、屋外用の汚いトイレと、水道がいくつかつけられた洗い場だけが忘れ物のように設置されている。三人はその砂利の上に寝転がる。

「これ、どれくらいの頻度で見えるんだろう」

「さあ」

「結構見えるんじゃない。流星群って言うくらいなんだし」

「そっか」

「全然見えんな」

「そうだな」

「あ、今のそうじゃないか」

「あ、私も見えた。あれ、やっぱりそうだよな」

「ほんとか、見逃した」

ケイはそう言つて、小石を手にいくつか持つて、その冷たさを感じていた。車道に灯りが見え、車が凄まじい音を上げて通過する。

「あ、見えた。大きかったな」

「ああ、見えたな。もういいんじゃないか」

トオルはそう言つて起き上がり、後頭部に付いた小さな石をはらつた。

「早いな」

と言いながら、ケイも立ち上がった。片桐は胸の前に両手を組んだまま、まだ空を見上げている。その姿がひどく無機質に見えて、そのまま置いていても構わないように思う。

「トオル、トイレ行こうか」

「一人で行けよ」

「暗いから嫌だ。付き合えよ」

二人は30メートルほど先のトイレに向かう。寝転んでいた片桐が、

「ちょっと置いてかないでよ」

と叫ぶ。二人は振り返つて、

「そこで寝転んでるよ、すぐ帰つて来るから」

と叫ぶ。もう一度、空を見上げると、また流星が見えた。

「こっちは静かだけど、空の向こうは騒がしいんだろうな」

両手をポケットに突っ込んでケイが言う。砂利を踏む音が心地よいリズムで鳴る。

「まあ、そういうことになるな」

「なあ、何してんだろな。俺ら同僚つてことになんのか」

「まあ、そういうことになるな」

「同僚つて一緒に星見るもんなの」

と笑いながらケイは言った。トオルは

「まあ、そういうことになるな」

と言い、肩を揺すった。遠くで鈴虫の鳴く声が聞こえる。

## アイファウンドイット

車はようやく光のある場所へ入った。時間は深夜12時を回っている。

「ウチに泊まる？」

トオルは決心した表情で言った。BGMが気にいらず、身を乗り出してプレーヤーを触っていたケイは、手を止めて、

「いや、もとからそのつもりだから」と言った。

「あ、そうなの」

とトオルが間抜けな声を出す。低い天井と暖房で少し気だるさを感じる。信号で止まっている間に、トオルはアタツシュボードから1枚CDを取り出して差し込む。空になったCDケースを再びしまう時に、トオルはちらと片桐を見た。彼女は一瞬戸惑った表情を見せて、すぐに

「私なら大丈夫だよ。皆手、出さないでしょ」

と何故か体を縮めた。

「ああ、トオルはそれを気にしてたのか。それなら安心しろ。そこまで渴いじゃないよ」

後部座席から見える景色を見ながらケイは言った。

「すごく失礼」

と片桐は言ったが、車の外を流れるネオンに夢中になっているケイの耳には届いていない様子だった。

部屋に着くと、ケイと片桐はコタツに入った。まだ冷たいコタツに急いで電源を入れるが、二人はリスのように身を震わせた。冷蔵庫からサイダーを取り出してコップについでいるトオルの後ろ姿が見える。

「あ、コップ、2つしかないや」

開けっ放しの冷蔵庫がカタカタと壊れたような音を出している。

「何でもいいよ」

ケイはどうでもよさそうにテーブルの上に置かれた楽譜を取り上げる。横から片桐が首を挟み、のそきこんで、

「トオルちゃん、楽譜なんか書けるの」

と声を張る。トオルは高い位置にある棚を開け、湯飲みを取り出して、

「楽譜は自分が覚えとく用だから、適当。記号とかは結構抜けてるよ」

と言って、サイダーの入ったコップを持ってくる。ケイは礼を言つて、部屋の隅に置かれたピアノを見て、

「それでピアノ」

と独り言のようにつぶやいた。三人はコタツに入り、あわせたように猫背になる。

「トオル、弾いてみるよ」

「あ、いいね。私もトオルちゃんのピアノ聴いてみたい」

そう言つて、片桐は手を叩く。子供の頃に、兄の誕生日会でハッピーバースデイを歌ったのをふと思い出して、ケイは「ケーキとか甘いものないかな」と小さな声で言う。

トオルは、本当に重いものをもたされているかのような動きでコタツを出た。

「男の一人暮らしでケーキとかねえよ」

と言い、ピアノの前に座る。楽譜を確認して、ピアノに指をかける。1音。確かめるように鍵盤を抑える。楽譜を見ていた片桐はトオルの方に目をやる。

トオルの頭の中で音が広がる。次にどの和音を出せばいいか、感覚で分かる。頭を少しだけ下げて、前傾姿勢を取り、指を動かす。

コタツから出ているコードのうねりを、確かめるように触っていたケイは、その手をすぐに止めた。1分間。トオルがピアノを弾いていた時間だ。それだけで楽器についての知識が無い二人にも、彼の

才能がはつきりと分かった。

「トオル、バンドやろう。もったいないぜ、お前の才能」

ケイはこちらを向き直ったトオルに言った。シの音を出して、

「お前、楽器できるの？」

とトオルは聞き、ケイは出来ないただけ答えた。

「じゃせめてギターできるやつ探さないとな」

と言って、トオルはまたピアノを弾いた。今度は強弱をつけたジャズに近いプレイだった。それを1曲やりおえると、ケイとトオルは、落ちていたリングを拾うように

「ギターできるやつならいるじゃん」

と声を合わせた。コタツの中で足をぶらぶらと降っていた片桐は、  
「え、あたし」

と自分の顔を指差す。ケイとトオルはすぐに言った。

「あるあ、ねーよw」

部屋で一人ギターを弾いていたダイは、その手を止め、一度、大きなクシャミをした。

## 「ケイ」エムワンの奔走1

「M-1（漫才コンテスト）に出よか、それか歌手オーディション受けるか」

講義室は休み時間で、学生達の雑談に支配されている。1回生の夏、坂道で話しかけられてからケイと山縣は、すっかり打ち解けていた。初めの話題が当時世間を騒がせていた猟奇殺人の話だったのも、今となっては山縣らしい。

きよんとするケイに、山縣はさらに続ける。

「富士山も登ったし、あとはエムワンが歌手やん。どうでもええけど、俺、あの後、一人で富士山3回登ったわ。インストラクターのバイトでな。君も誘ったやろ」

「富士山の話はいいよ、どうでも。それよりお前、一緒にやってた相方はどうしたの？」

長机に置かれたペットボトルを取り上げて、上手そうにぐいぐい飲むと山縣は、教室の横一杯に広がった黒板を見て、

「お星様になったんやな」

と遠い目で言った。

「いや、ペットが死んだときの子供への言い訳かよ。本当のことどうなの？」

「実はな、あいつ借金があったんやけど、それで首が回らんなってもうて漫才どころちゃうねん」

山縣の相方には一度だけ会ったことがある。安く靴を買おうと誘われて、相方君のバイトしている靴屋に行ったのだが、その時に少しだけ話した。借金で困っているような素振りは無かったが。

「そりゃそうやろ、そんな時から客にそんな素振り見せとつたらとつくに首やろ」

斜めにかぶっていた帽子を脱いで、山縣は言う。

「心読むなよ」

ケイは羽織っていたジャケットを脱ぎ、イスの背にかけながら言った。クルクルと指で帽子を回していた山縣は、思い出したように「今日、セクシーは？」

と聞く。

「さあ」

膝をついたまま、ケイは答えた。

チャイムが鳴り、白髪の講師が入ってくる。学生達の雑談は少し収まったが、講義が始まるという雰囲気でもない。講師は騒がしい教室に少し眉を寄せる。

ケイは机に置いていたノートを鞆に直しながら、

「なあ、ふけよっか」

と山縣の背を叩き教室を出た。教室の外には、ひんやりとした心地よい空気が溢れている。ケイは軽い足取りでそこを抜け、中庭に出る。その中心には木が3本あり、それを囲うようにベンチが5台、円形に置かれている。誰も座っていないベンチを見つけると、ケイは勢いよくそこに座り、鞆を横に置いた。

同じ道を辿って、山縣がゆっくりとこちらに歩いてくるのが見える。白に黄のラインが入ったスニーカーと、ポーターの鞆が印象的だ。

「君の悪い癖やな」

と、発売中止になった煙草、ゴールデンバットを口にくわえる。

この煙草を買い占めるのにつき合わされたのを思い出す。

「君、煙草は？」

「やめた。臭いし、料理の味が分かりにくくなる。それに喉に悪いだろ」

「1ヶ月くらいやったな、煙草」

山縣は、いつものように目を細めて煙を吐き出す。

「M-1、考えといてや」

「今日、車？カラオケでも行こうか」

「うーむ。なんか俺たちいつもそうやな」

「倦怠期の夫婦か」

山縣は、上をむいてカカカ、と笑った。風が吹いて、木の葉が揺れ、ちょうどアンテナの入っていないテレビのようなザザ、という音がした。二人は勢いよく立ち上がると、

「行きますか、いつものように」

と、鞆を掴んで駐車場へ向かった。風はなおも吹いている。

## 「ケイ」エムワンの奔走2

「これ」

そう言つて山縣がケイに渡したのは、大手音楽レーベルのオーディション告知チラシだった。前面にピンクが散りばめられ、所属アーティストのライブ写真などが掲載されている。

「本気だったのか」

チラシに目を落としながら言つと、山縣は、「勿論」と親指を立てた。チラシの裏面には詳細が載っている。日にちは、

「えっ、今日!？」

確かにそこには今日の日付が書かれている。山縣は唇を尖らせて、こっけいな表情を作り、「イエス」とやたらはつきりとした発音で言つた。

「今から受けに行こうや」

「お前、ほんと即行動派な」

とケイは呆れる。休日に突然呼び出した理由はこれだったのか、

と一人納得し、

「構わないけど、本当に受けるつもりか？」

と聞くと、山縣は少し考えて、

「現場の空気次第だな」

となぜかまともなことを言つた。

「うん、多分無理だと思つてたよ」

ケイはペットボトルの水を飲みながら言う。

「まあ、あの雰囲気で俺らみたいな半端な感じではいけへんやろな」  
会場の熱気に蹴落とされた二人はうなだれながら、ため息をつく。  
雑踏と眩しすぎる太陽が街を支配する。

「なんか中途半端な、俺ら」

「まあ人生はそんなもんやろ。ほな、M-1出るか？」

ゴールデンバットに火をつけて山縣は言う。ケイはぼんやりと空を眺めて、次に山縣の方を見る。煙草を持つ指先が赤く滲んでいる。深爪でもしたのだろう。慢性的に滞在する鈍い痛みがこちらにも伝染したような気がして、自分の指を見てみる。目の前を一羽の鳩が首を振りながら横切つてゆく。鳩は時々、床に敷き詰められたタイヤの隙間をつついては餌を探している。歩道を通る自転車に驚いて、鳩は少しだけ羽ばたいたが、すぐに着地し、少し離れた場所で、また同じように餌を探した。

「やりますか」

ケイの放ったその声は、行き交う人々の鞆に滑り込んでいくように、その場を駆け抜けた。山縣は、その背中を見ているかのように、うつろな目で人々を眺め、

「エントリーまであと1ヶ月。ネタ作つて、練習して。忙しなるな」

大型トラックがクラクションを鳴らし通り過ぎる。辺りは1時間前と何一つ変わっていないように見える。若者は先の尖った靴を履き、急ぎ足。老夫婦は他愛もない会話と観光を楽しみ、女の子は流汗の服を着て、イヤフォンを耳にさす。子供たちはいつまでも無邪気そうだし、カップルは今だけは幸せそうだ。

この世界にたくさんさんのカラーフィルムを巻き付けて、鮮やかな色に仕上げたのは誰なのだろう。

不意に指にひっかかるものを見つける。袖口から出た糸のほつれ。ケイはそれをちぎり、無造作に捨てた。その動作を見た鳩が、また首を振りながらこちらに近づいてくる。山縣のくわえている煙草の先が焼けるじりじりという音が耳元でうるさく聞こえたような気がした。

## イージーカム

秋になると運動会で流れていた『田園』という曲を思い出す。ケイの家は比較的田舎にあり、周囲を田んぼで囲まれている。10月になると、すっかり穂を重くした稲で田んぼは金色に染まる。

夏の終わりに目指したM-1も、書類選考で必要となる写真の用意が間に合わず、失格となっていた。夢は来年へ持ち越しとなるか、焚き火につっこまれて灰になるか。いや、燃えないゴミでしかないような気がする。

スピーカーから割れた音で『田園』が流れ始めた。ケイは自然とその音のする方へ向かう。それはどうやら坂の上のフェンスで囲まれた運動場のようなところから流れているらしい。坂を下る学生たちは、皆まちまちに手に食べ物を持っている。フランクフルトや焼きそば、たこ焼き。可愛らしい格好の女の子と目が合う。ケイはすぐに目をそらすと、運動場を目指した。

曲がサビの部分に差し掛かった時、ケイはちょうど運動場に到着し、そこから見える30くらいある紅白のテントを見ていた。その日ばかりは誰も運動をしようという者もない。そりゃそうだ、学園祭で我関せずと運動するような輩はちょっといない。いや、山縣を除いて、か。

ケイがわざわざ一人で他大学の学園祭に足を運んだのにはある理由がある。テントの間を縫うようにして、目当ての人物を探す。前から来た学生と肩がぶつかる。反射的に振り向くと、へらへらと笑いながら、「すいませーん、へへ」と前髪を触りながら去っていく男の姿が見える。

「おお、大丈夫か」

不意に前方から声をかけられる。慌てて前方を見ると、そこにはエプロン姿のダイが立っていた。

「あいつ、いつもあんな感じなんだよ」

三角巾を頭にかぶったままダイは苦笑いを浮かべる。

「別に、かまわないよ。ただ俺はああいふナルシストはあんまり好きじゃないな。顔がいいならいいが、悪いのに格好いいと思ってるのは勘違いだ」

極めて無感情にケイはそう告げたが、その心中が穏やかでないのは誰の目からも明らかだった。友人を責められたダイは、一層の苦笑いを浮かべ、

「まあ、あいつにもいいところがあるんだよ」とその場を取り繕う。

ダイの参加している店で買った大盛りの焼きそばをほうばりながら、

「あんまり可愛い子いないね」

とケイは言う。上手く割れなかった箸で器用にそばを口に運びながら、周囲を見回す。学生は地味で真面目か、派手にしたいんだろうが、地味だったのがすぐに分かる人間ばかりだった。それは男女に共通する。

「まさか本当に来てくれるとは思わなかったよ」

三角巾を取り、置いてあるイスに腰掛けると、ダイは言った。焼きそばに入っている紅しょうがを避けながら、

「ああ、実は頼みごとがあつてさ。そのついで」

とケイはことさら難しい顔をした。10月1日に行われた内定式で、トオル、ダイと顔を合わせたケイだったが、他の学生との顔合わせもあったため、雑談しか出来ず、本題を切り出せずにいたのだ。怪訝そうな表情を浮かべるダイを一瞥してケイは話を続ける。

「実はバンドやりたいなと思っててさ。で、ギターやってたつていうお前に声をかけに来たんだよ」

「あー、なるほど。でも他に誰かいるの？確かケイは楽器弾けないよな」

「ああ、勿論だ。トオルも声をかける予定。あいつはピアノが弾け

るから」

「ピアノとギターか。もう一つ楽器があるといいんだけどな」

ダイは首をひねる。それを見て、

「我俣は言っな」

とケイは焼きそばの入っていた紙容器をゴミ袋に投げ入れた。

「うーん、構わないけど、どんなバンドがしたいの？コピーバンド？」

ダイに訪ねられて、ケイは初めて、特に予定のないことに気付く。とにかくバンドをしたい、それだけだった。

「さあ、特に決めてない。トオルに声かけてOKなら一度、打ち合わせしようか」

ケイは上着のジッパーを上げて言った。それに呼応するようにダイは三角巾を被りなおし、立ち上がる。期せずして二人は並び立ち、風が吹き、黄色い砂が舞い上がる。祭りというには形式的な行事の中、彼らは別れを告げて、別の方へ歩いていく。

数日後、トオルから正式にOKの連絡があり、10月17日、3人はバンドを結成することとなった。

## オーブンドア

「まず、どんな音楽をやりたいか、だけど」

テーブルには水の入ったコップが3つ置かれている。奥にケイが、そして手前にはトオルとダイが並んで座っている。ケイは被っていたハンチングを脱ぐと、鞆から紙を取り出し、それぞれに配った。

「あんまり音楽のジャンルとか分からないから、やりたいジャンルの曲をリストアップした」

3人の頼んだ日替わりランチが運ばれてくる。重苦しい茶色の壁には、メニューが書かれた紙や、外国の写真が貼られている。カウンターには、家庭用の水槽が置かれており、数匹の魚が泳いでいる。昼時をはずしたためか、周囲に他に客はおらず、さつきから水槽に取り付けられた機器が細かく振動する音が響いている。

「ふうん、なんとなくバラバラだな。ロックとかフォークとか色々書いてるし。まずオリジナルバンドかコピーバンドかどっちをしたいの？」

トオルは魚のフライを口に運んで言った。ケイもそれに呼応するように、フライを口に入れ、咀嚼してすぐに飲み込んだ。

「どっちをすべきかな？」

この質問にダイが答えを返す。

「バンドの目的によるな。ライブとかしたいなら1から曲作るよりは、コピーバンドの方が早い。本気で上目指すなら、オリジナルでやる方がいいな」

見るからにドレッシングをかけすぎたサラダにフォークをさし、考えるケイに、さらにトオルが

「そうだな。バンド組んでどうしたいんだ？」

と聞く。口に入れたサラダは想像通り、味が濃く、眉をよせる。

店内には『QUEEN』の『Bohemian Rhapsody』が流れている。ちょうどオペラ部分に入ったところでようやくケイ

は、

「ミュージックステーション出演を目指す」

と言い切った。

トオルとダイは、箸を止める。少しの沈黙を挟み、ダイが話をまとめようと、

「今の話だとメジャーデビューしたいってことだろ。じゃあオリジナルバンドにすべきだな」

と返す。

「曲は？誰が作るの？俺か、それともダイか」

そういつてダイの方を見たトオルに、ケイが

「俺が作るよ。俺の作ったバンドなんだから」

とすっかりサダラを食べてしまい言った。トオルは額を手で押さえて、

「いいけど、楽器も弾けないのにどうやって曲作るんだ？楽譜とかコードとかにおこせるの？」

と不可解そうにたずねる。

「いや、無理だな。だから二人に協力してもらってやるしかない。

曲自体はもう出来てるよ」

「聞いてみないと何ともわからないな」

とトオルはおしぼりで手を拭いた。

「とにかくコードおこしから始めなきゃいけないわけだけど、俺かトオル、どっちがやる？できればトオルにやって欲しいんだけど。

卒論とバンドで忙しくてあまり時間も取れないし」

トオルは少し考える素振りをみせ、「別に構わない」とだけ答えた。

その日はそれで解散した。帰り際、水槽の中で泳いでいた魚と目が合ったような気がした。

数日後、ケイはトオルの部屋を訪れた。前と変わらず、雑然とした部屋だ。コンビ二で買ってきたジュースを冷蔵庫にしまうと、

「ところで、ずっと聞きたかったんだが、コードって何？」

とケイは聞く。コタツに足をつつこんだトオルは驚いた顔で、

「え、それすら知らないで曲作ってたのか？簡単に言うって和音のパターンで、これを組み合わせる曲を作るんだよ。曲の中で使われるコードの構成は大体決まったパターンがあるから、それに沿って作曲するのが普通なんだけど」

と答える。トオルの座っている場所とは別の辺に足を入れると、

ケイは

「コードのパターンが決まったら、同じような曲しか出来ないことになるじゃないか」

と反論する。もみ手をしていたトオルは小さくため息をつき、

「そんなことないよ。基本のコード理論は知ってないと曲として聴きにくいしな」

とテーブルに目を落とす。ケイはジャケットのボタンをはずして、「よくわからないな」と、独り言のようにつぶやいた。

「まあ、とにかく作った曲を聴かせてよ」

とトオルが仕切り直すように言う。その言葉に鋭く反応したケイは鞆から、数枚の紙を取り出し、

「10曲分くらいの歌詞を持ってきた。どれにする？」

とトオルを見る。

「何でそんな持って来てるんだよ」

とトオルは笑いながら、歌詞がプリントされた紙を見る。青色のカーテンが閉められており、外は見えない。朝は曇っていて、灰色の空が広がっていた。トオルが歌詞を見ている間、ケイは部屋を見回し、置いてあったアコースティックギターを手に取る。適当に弦を押さえ、親指ではじく。

「ピック使って弾けよ」

とピックを渡す。ケイはそれを受け取り、再度弦をはじく。頭の中で思い描いていた音は出ない。砂漠を歩く旅人のように。

「トオル、和音何か教えて」

テーブルの上に歌詞を置いて、ケイの方に歩いてくると、指をつまみ、それぞれの配置に移動する。

「それがC。定番のコードで、爽やかな音って言われてる」

ケイはなるべく左手を動かさないようにして、ピックを動かす。ピックの持ち方もトオルに指導され、もう一度、弾く。和音が部屋に鳴り響く。ケイは嬉しくなって、何度か音を出す。青空をイメージさせる、その音をケイは忘れないように頭に留める。

「面白いな、ギター」

とケイはギターを弾く手を止めて言った。トオルはそれに答えず、ギターをケイから取り上げて膝に置き、

「よし、『ヨコハマレイン』にしようか。聴かせて」

とピックを持ち、構える。

テーブルに置かれた歌詞から『ヨコハマレイン』と書かれたものを取り上げて、

「なんか突然歌うのって恥ずかしいな」

とケイは言う。トオルは短く「すぐになれるさ」と返した。さっきまで部屋に溢れていたCコードとは対照的な悲しい曲調を頭に思い浮かべ、ケイは歌い始めた。

## ハザードイズミ

「ヨコハマレイン」

マイマイの揺る季節　小雨降る朝　小さな希望　胸に　あわただしい日々　また始まる

梅雨に入って湿気が高い　今日の降水確率は　20%のはずだったのに　何故だろう　何故だろう

ヨコハマレイン　降り積もれ　悲しみも今に思い出に　不揃いの切り口が今も

ヨコハマレイン　降り積もれ　すべての夢を洗い流して　それでも僕はこの場所に立ち続けるだろう

いつのまにか柔らかな雪が積もる季節の始まり　ありふれた冷たさ　もいつのまにか慣れていた

君に忘れたことばかり次々と浮かんでくるよ　安っぽい春ですらあげられない

ヨコハマレイン　降り積もれ　代わる代わる季節が移り変わっても　変わらないものもあるだろう　いまここに

ヨコハマレイン　降り積もれ　例えばこの未来を洗い流して　はかない花に少しだけ水をあげて

見たことない景色を見よう　聞いたことない歌を歌おう二人で

ヨコハマレイン　降り積もれ　あの恋を隠せるほど　降り積もれ　降り積もれ　降り積もれ

ヨコハマレイン　降り続け　決しておわりの笛を吹かぬように　僕だけを包み込んで　ヨコハマレイン

ケイは最後までアカペラで歌う。トオルは歌い終わると、難しそうな顔をして、

「ヨコハマレインって何？」

と冗談っぽく言った。

「横浜で降る雨だろう、多分」

とケイが言うと、

「お前が作ったのに、多分なのか」

とトオルはまた笑う。

「歌詞なんて思いつきみたいなもんだから、ほとんど宇宙から降りてきてるに等しい。何だか最近の単純で分かりやすく、月並みな歌詞は嫌なんだよ」

そう言つて、ケイはポケットに手をつっこむ。「まあ、分からないのも問題だな」とトオルは口元に微笑みを浮かべ、言う。

「まあ、歌詞はともかく、曲はかっこいいな。バラードだけど、フツクがある」

トオルが褒めるのを聞き、ケイは胸を撫で下ろし、「そうだな」と返したが、その答えを待っていたかのように、

「ただし、これを音符におこしてくのは難しいな」

と釘を刺す。ポケットから手を出したケイはすぐに、「どうして」と聞き返した。ベッドの上でギターを持っていたトオルは、ピアノの前に移動して、

「例えば、この音がド、でこれがレ」

と一音ずつ鍵盤を抑える。

「お前が発音してる中には、この鍵盤の間でどっちつかずって音が多く混じってるんだよ。つまり楽譜上に存在しない音ってことになる」

「おお、じゃあ新しい音の発見じゃないか」

とケイは冗談混じりに返す。先ほどまでトオルが座っていた部分

の毛布がまだわずかにへこんでいる。

「そういうことじゃないんだよ。今のままじゃ演奏できないから、その中途半端な音の一つずつ、どっちにするかを考えなきゃいけないんだけど、それによって曲が微妙にお前のイメージと変わる。それに転調してる箇所がいくつかあるから、これも調整しなきゃいけない」

「なんだか、よく分からないが、上手いことしていけばいいよ。それに転調って何だ？」

「うーん、転調ってのは言葉で説明しにくいんだけど、簡単に言うと、この音の次にこの音が来ると変だよ、っていう感じかな。例えばプロの場合でも曲の最後で盛り上げるために、サビをアレンジして歌うとき、急に高い音に移行したりとか。まあ基本的に転調すると聴きにくくなるから避けるべきなんだよ。楽器をやらないお前にとってはよくわからないかもしれないけどな」

何だか分からないが、どうもダメらしい。ケイに分かったのはその程度だった。自分が音痴であると思ったこともないし、言われたこともない。

「でも、もしかしたら音感に問題があるかもな。1音もはずさずに曲を歌わなきゃいけないんだけど、今のお前にはそれが難しいかもな。曲を作る段階では、時間さえかけりゃ補正は出来るけど、実際歌うとなると、例えば楽器がはずしても、ボーカルが牽引するぐらいに正確な音感が無いとやっていけないぞ」

自分が思っていたよりバンドというのは大変なようだ。バンドをやっているやつはたくさんいる。皆が皆、そんなすごい音感持つてるのか。ケイは深い思考の渦の中で、何とか息をしようともがき、水面に顔を出そうと、

「その内なんとかなるだろう」

と言いつつ訳のよいことを口にし、また渦に引き込まれそうになる。「お前は別に音痴じゃないよ、カラオケ1回行った時にも歌ってるのは聴いてるし。何か楽器をやった方がいいってただけだ。そうだな、

キーボードとか買ってみれば」

トオルは溺れるケイに浮き輪を投げるように言った。取り急ぎケイはそれを掴む。しかし、ある不安があるのは確かだった。それはケイがあらゆる音楽を記憶し、それと同じ音を出しているに過ぎないという点にあった。だから、カラオケでキーを変えるとそれだけでどう歌っていいか分からなくなる。ケイにとって楽器の演奏は、ただそこにあるもので、歌うべき音を教えてくれるものではない。オリジナルの楽曲に関しては記憶する元が無いのだから、ケイにとっては正確に歌える道理はない。

「楽器買って何とかなるものなのか」

とつぶやくように言う。その声はカーペットに落ちて、染みのようにそこに落ち着いた。

「キーボード弾いてれば、少しずつだけど、そこにある音だけで構成するようになってくるよ」

とトオルは落ち着いた声で言う。ケイはそれを信じるしかなかった。

朝から夕方までかけて、『ヨコハマレイン』と他に1曲を楽譜におこす。

「後日コードをダイにもメールで送っておくよ」

とトオルはピアノの電源を切って言った。

「なあ、バンド名決めようよ」

とケイは帰り際に持ちかける。

「駅までの間に考えようか」

そう言ってトオルは部屋を出て、車を家の前に回す。

「何がいいかな。会社名とか？」

「BUZZか、やめとけよ」

運転しながらトオルはケイの意見を却下する。赤信号に目をやりながら、

「歌詞に入ってた言葉にしようか。何かあったかな」

とトオルは背にもたれる。空は暗い。信号が青に変わり、車が動き出す。人通りは少なく、寂しい町だな、と思う。

「ムンクにするか。そんな歌詞無かった？」

と思いついたようにトオルが言ったが、今度はケイが「作った曲の中にその歌詞はあるけど、ムンクは既にいるぞ。それになんかバンドイメージと合わないしな」と却下する。

「ナナメって曲があるんだけど、それにしないか」

とケイが提案する。遠くに山が見える。黒く、重苦しく見える。チーン店の看板がうるさく目に入る。

「また考えておこうか」

トオルはそう言っていると、駅のロータリーに車を止めた。ケイはすぐに車を降りる。ロータリーには他にも数台の車が停まっていて、タクシーが数台出入りしている。駅に吸い込まれていく人々の背からは、楽しそうな雰囲気など見て取れない。そんなもんだらう。

「太陽みたいな底抜けに明るい曲は作れないが、月の光くらいなら作れるかもな」

とケイは言った。空に月はまだ見えない。カラスのシルエットが3羽ほど空を横切る。トオルも車を降りていた。二人は黙って、ほの暗い空を見上げていた。

僕らはどこに向かって走っているんだらう。早く光の射す場所に行かなくちゃ。

「早く行けよ」

トオルが言った。

「分かってるよ、またな」

ケイはそう言って改札に向かう階段を駆け足で上る。

その日の空は暗かったが、雲は無かったように思う。

## プラクティカルリレーション

観覧車の頂上でキスをする、なんて下らないことはしないけれど、二人はじゃれあうようにキスをした。目を開けると、上半分がガラスになっていて、海が見える。それにいくつかの商業船と観光船。それらの灯りが少しだけ海面に反射する。黒い海に波が立っているのがわかる。

「よかったの？」

ケイは明日香の頬に指で触れ、聞いた。彼女がうつむいてたので、マフラーで口から下が隠れる。小さな観覧車内で二人の肩は触れたまま、忘れ去られてしまったようにそこにある。今度は積極的に唇を押し当てて、

「よかったんだと思う」

と彼女は頬を赤らめる。地上が近くなり、やがて観覧車は止まり、二人は手をつないで降りた。

少し歩いて通りに出ると、街路樹に電飾がくくりつけられ、青色の灯りが遠くの方まで続いているのが見える。白い息を吐きながらゆっくりと歩いていく。コートのポケットで携帯電話が鳴った。ケイはそれを取り出して、画面に表示された恋人の名前を見て、大きく息を吐き、空を見上げる。その様子を明日香は心配そうに眺める。

明日香とは以前の飲み会の後に何通かメールを交わしただけであった。また会おう、という社交辞令を交わして、それからずっと連絡は無かったし、ケイの方からもしなかった。お互いに恋人がいて、積極的になるわけにはいかなかったからだ。

明日香のことを忘れかけていた頃、突然、電話があり、一緒にイルミネーションを見に行こうと誘われたのだ。友達と遊ぶだけで、やましいところなどないのだと自分に言い訳し、ケイはそれを承諾した。結局、二人でご飯を食べ、観覧車に乗ろうという流れからキ

スをしてしまった。突発的な事故のようでもあるし、二人がそれを望んでいて、なるようになったような気もする。

「ねえ、このネオン瞬きするらしいの。雑誌で読んだんだ」

明日香ははしゃいだ素振りで言うが、こちらに目は向けない。ケイは携帯電話をしまい、

「一瞬消灯するってこと？ 見れたらいいね」

と彼女に微笑む。ようやく彼女はこちらを向いて、笑顔を見せる。おもむろにこちらに手を伸ばし、ケイのコートのボタンを留める。ほとんど条件反射的にケイは彼女の体を腕で包んだ。二人の周りをいくつものカップルが横切る。微かな視線を感じるが、視界のほとんどは彼女の頭で遮られている。髪からは甘い香りと、艶やかな感触が伝わってくる。そして、何の告知もなく、ネオンが消え、1秒後にまた点灯した。手前から順び点き、光が奥へ流れていくように見える。

「今、消えたね」

彼女の頭に向かって言う。

「本当？ ケイ君が抱きしめるから見逃しちゃった」

左手が彼女のお尻に触れる。その柔らかな感触は、履いている厚手のジーンズのせいでよく分からない。彼女は突然頭を挙げ、ケイの顔を見上げ、

「エッチ」

とだけ言った。二人はまたキスをしたし、その後だって何度もした。それに触発されたカップルが近くでキスをする。コートでまた携帯電話が鳴った。

夥しい数のネオンと、曲がった道。その先はしかし暗くてよく見えない。

明日香との未来はない。彼女の方はどうだか知らないが、ケイは今の恋人と上手くいっている。お互いに愛しあってもいるし、それなりに将来のことも考えている。

「私、彼氏と別れたの」

明日香は12回目のキスのあと、そう告げた。ケイは驚いた素振りも見せず、「そう」とだけ返事をした。眉で揃えた前髪を触りながら、明日香は取り繕うように

「別にケイ君に彼女と別れて欲しいとかそう言うつもりはなくて、こうして会ってくれたらな、って思ってるだけ」

と目をそらす。

言わなければいけないたくさんの言葉のかわりに、ケイは13回目  
目のキスをした。

## ザ・シームズ・カマンダン

「なんでエレキギターなの？」

ケイとトオルは声を揃える。ダイはエレキギターのコードを機材に差し込みながら、二人の方を見て、「いや、今回はエレキかなと思ってる」

と首を揺らす。バンドのスタイルをピアノ＆ギターと決めた時から、ケイとトオルの頭ではアコースティックギターの音が流れていたし、特に、今回の曲「ヨコハマレイン」はアコースティックが似合う。

「まあ練習だからいいけど」

ふてくされたようにケイは言う。紺のパーカーに黒の革ジャケット。着古して、フェイクの革にはひびが入っている。

毛糸地の上着を脱ぎながらトオルは苦笑いを浮かべる。気にせずダイはギターの音と、機械の相性を調べる。鋭くて粘り気のある音がスタジオ内に響き渡る。ケイとトオルは目を合わせて、全然雰囲気に合わない、と言葉に出さずに意識を共有した。

続いてダイの発声練習が始まる。先ほどからイスに座ったままのケイはその様子を黙って見ている。トオルはというと、すっかりピアノの前に座り、自分の世界だ。あまりにも暇だったので、ケイは立ち上がって、もう1本あるマイクを掴み、

「So make me love!」

とデタラメなメロディーで歌い始める。

「going to my dream land. Just knock only me」

隣で充分に発声練習を終えたダイが、「何それ？」と聞くので、ケイは前を向いたまま「今作った」と覚めた目つきでいる。

「ダイ、送ったコードはちゃんと見てきた？」

とトオルがたずねる。ばつの悪そうな表情を浮かべ、

「まだ見れてないんだ。でも一応、メールは印刷して持ってきたから」

とダイは返す。そしてその落ち度をかき消そうと急いで印刷した紙を取り出し、ギターで弾き始める。一通り弾き終わると、ダイはトオルに、「こんな感じ？」と聞き、「まあいいんじゃない」と人ごとのようにトオルは返す。そのやりとりを眺めながら、ケイはマイクを触る。冷たい金属の感触と、少しの湿りを感じる。いくつかのネジを回し、高さを調節すると、

「試しにやってみよう」

とわざわざマイクを使つて言った。

「OK」

トオルはそう言うと、ピアノを弾き始める。流麗な指使いから正確に刻まれる音の世界。

「待った」

その声でピアノの音が急に止まる。止めたのはケイだ。

「歌い出しがよく分からない。そのフレーズを2回しで歌い出したらいいい？」

「回しつて単語の意味が分からないが、そうだな、このフレーズが2回あつてから歌い出し。じゃ弾くよ」

再びスタジオに音が流れる。所定の位置でケイは歌い始める。

「違う。もっと上。1・5音くらいかな。ピアノとはずれてるのわからない？」

ピアノを止めてトオルはケイに言う。ギクリとしたケイは、強がって

「全く分からないな。とにかくこの音でいいのか」

と先ほどより高い声を何度か出し、トオルにOKをもらう。ケイはその音を忘れないように頭の中で何度も反復しながら、イントロを聞く。歌い出し、少しずれたが、微調整して合わせる。ダイ、トオルともに何度か演奏ミスをしながらもサビ終わりまで終える。

ケイは大きく息をつき、持ってきたペットボトルの水を飲む。ト

オルはピアノの前を動かない。ダイは首を揺らしながら、ギターで小さな音を出し続けている。

「ボーカルの音程が揺れてる。音程が安定しないと聞きづらいから上手く聞こえない。直さなきゃいけないな。課題は山積みだ」

口をへの字に曲げてトオルは言う。ケイは正面に見えるガラス窓をぼんやりと眺めていた。窓にはいくつかの傷があり、そこから見えるのは見たこともない機材ばかりだ。

「そのへんはいつか上手いことなるだろ」

ペットボトルを鞆に直し、ケイは言う。トオルはその答えを聞きたくもなさそうに、鍵盤に目を落とす。

「俺、コード弾きじゃあんまりだな」

ギターを弾いていたダイがつぶやくように言う。

「どうということ？」

トオルが面倒くさそうに聞く。二人の会話はお互いの間で落ちてしまつて、交わっていないように感じられる。

「コードどおりに弾いてるけど、トオルの弾くピアノもコード弾いてるからさ」

語尾がかすれるように小さくなる。面倒な言い回しをするダイに少し苛立ちを見せる早めの口調で

「どうということ？」

とダイが訪ねる。

「もったいないな」

とケイが割り込み、その言葉に反応したダイは、

「そう、まさにそれ。もったいないんだよ」

と大きなジェスチャーを交える。

「じゃあ俺がピアノで弾く音を減らせばいいのか？」

トオルは片手で音を鳴らす。

「そうだな、それしかないかな。じゃないとギターの、というか俺の存在意義ないしな」

「じゃあいらないなw」

とケイが茶化すように言う。予想に反し、ダイは無反応だ。トオルは笑いながら「ひでえw」とだけ言った。

「もしくは俺がコード弾きやめて、違うメロディーを弾こうか」とダイは提案する。

「じゃあそうしてくれ。トオルと打ち合わせして」

ケイはそう言って、ふらふらとドラムの方に行き、ドラムをデタラメに叩き始める。素人が叩くドラムは、意外にも軽快な音を奏でる。ひとしきり叩き終えると、ケイは満足そうに言った。

「こんなのどう？」

長い前髪をうっとおしそうにかきあげる。染色された前髪の間から、くつきりとした二重の目があらわれる。まばたきを数回する。ダイのギターに合わせてピアノを弾いていたトオルは、軽快な指の動きを即座に止めて、

「デタラメすぎ。ねーよ」

と笑ってみせる。

その間、黙々とギターを鳴らし続けていたダイは、我関せずといった様子。トオルは、先ほどのことを重ね合わせて、ダイに

「うっせw」

と一言。ダイは苦笑いを浮かべ、首をふらふらと横に振った。まるで首のすわっていない子供のように。ドラムに飽きたケイは、ふらふらとトオルに近づいた。

「トオル、いけそう？」

トオルは少し考えると、ケイの方を見て、

「解散だなwww」

と漏らした。

## エンドオブパーティー

キノコのカサが揺れる。いや、そんな髪型をしているだけだ。ケイたちが練習しているスタジオは、木下さんというキノコ頭の男が個人でやっているところだ。酒のせいで出たおなかを触りながら、「君達はどういう知り合いなの？」

とたずねる。練習を終えて、スタジオを出る準備をしていた3人は、木下の方を見て、誰か答えるよ、というように肘をつきあった。トオルが予約したスタジオということで、渋々、

「会社の同期です。まだ内定の段階なんですが」

と答えると、木下は不思議そうな顔をみせ、鼻をならした。ケイは改めて、内定者同士でバンドを組むという奇妙な巡り合わせについて考える。鞆を持ったケイを見て、木下が、

「君は中々筋がいいね。でもプロになりたいらな、ちゃんとレッスンを受けた方がいい。なんなら紹介しようか？」

と近づいてきた。垂直に降ろした指には濃い毛が生えている。靴とズボンは奇妙な色の取り合わせだ。ケイは明らかに不快そうな表情を浮かべ、

「そのうち」

とだけ答えた。そんなぶっきらぼうな様子を見ても、木下は構わず続ける。

「君たちがよければ、今度ここで内輪だけのライブをやるんだ。それに出不いか？」

トオルは表情も変えずにケイの方を見る。ダイは何かを考えている様子だ。ケイはトオルを見て、その表情から何も読み取れなかったので、

「少し考えさせてください。また、連絡します」

と首を触る。スタジオを出ると、黒い空に夕焼けが溶けていた。小道を進み、大通りで右に折れると、左手に小さなトンネルが見え

る。先のほうは暗くてよく見えないが、小さな猫のようなものが見える。ケイは足を止め、身をかがめ、トンネルの奥をのぞこうとするが、2人に置いていかれるので、すぐに諦めて小走りで追いつく。「さっきの話、どうする？」

少し呼吸が早まったケイが聞く。トオルはスケジュール帳を取り出し、

「予定の日、スケジュールが微妙かも。まあ、出るならあけるよ」とつぶやくように言った。ケイはライブなど無論したことがないので、少し興奮していた。それに対し、後の二人はライブにそこまでの関心はない。

「ま、このバンドでのライブとしては、1回目だし、いいかもな」とトオルが続ける。その言葉にケイは安心し、

「よし、じゃあ出ようか」

と結論を下す。空を烏のシルエットが飛んでいく。甲高い鳴き声が遠くなる。ギターケースを背負いながら歩くダイは自然と猫背になっていった。

「やめといた方がいい」

不意にダイはそう言った。ケイはすぐにその理由を聞いた。

「今のスキルでは人前でやるレベルに達してない」

「そりゃ練習ほとんどしてないしな。だからこそ、今回みたいな身内みたいなライブの方がいいんじゃないか」

「俺もケイと同じ意見だな。身内だし、いいんじゃない。それで悪いとことか直せばいいし。場慣れの意味も含め、やるのは賛成だよ」とトオルがケイに賛同する。ダイが歩くたびにギターケースが揺れて金具が小さな音を立てる。

「世の中には高いレベルのバンドが腐るほどいるんだから、今のままじゃだめだ」

薄いソールの靴がぺたぺたと情けないリズムを刻む。

「そんなこと言ってちゃいつまで経ってもライブできないよ」

とケイは苛立ちを含んだ口調で言い放つ。トオルは悪い雰囲気

なり、口を閉じる。誰も何も言わなかった。そのまま駅まで歩いて電車に乗って、その日は帰った。

それから、ケイは卒業旅行で海外に行った。ダイは卒業論文の執筆で忙しくなり、トオルも同様に多忙になった。そして3人は社会人になった。仕事は思った以上に難しく、たまに飲みに行くことはあったが、バンド活動はすっかり休止してしまう。

後に、ケイとトオルは言う。

「ダイとの人間性の違いで、バンドは解散したのだ、と」

## ケセラセラではすまさない

妙な夢を見た。彼女の膝に頭を乗せて、穏やかな気持ちで全てを話す。それはとても安らかな夢で、穏やかでない現実だった。

「ハッ」

ケイはが目を覚ますと、彼女の顔がすぐ目に入った。その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「ごめん」

どうしてだか、全てが一瞬で分かった。ただ、その時、部屋にどんなものが置いてあったかとか、テレビがついてたかとか、そんなことは何一つ分からなかった、ただ、彼女を泣かせている、ということだけがケイの頭を支配していた。

彼女が沈黙しているので、ケイは再度謝った。彼女は涙を拭って、笑顔を浮かべて、

「もういいよ。別れて、その浮気相手のとこいきなよ」

と鼻声で言った。その強がりには、胸がカッターで切り裂かれるような鋭い痛さを感じさせる。

「俺は、そんなつもりはないよ」

下らない言い訳で彼女の気が変わるとも思えなかった。1年前に買ったブタのぬいぐるみが冷ややかな視線をこちらに向けている。こっち見んな。

「もう、どう接していいかわからない。早く帰って。見てるだけで気持ち悪いの」

ケイはようやく起き上がった。酒を飲みすぎたせいで、まだ頭が痛い。それにこれが夢のような気がしてならない。彼女の肩に手を触れようとすると、彼女は急いで体を反らした。空を切った手は行くあてを失い、おとなしく自分の膝に乗る。変な話だが、こうあってもなお、膝枕をしてくれていた彼女の優しさにわずかな希望を感じる。

「俺のことが嫌い？」

「そういう問題じゃない」

そりゃそうだな、と納得する。彼女は目も合わせない。今度はキスをしようと顔を近づける。首をねじり、それを逃れようとしたので、結果的に彼女の髪にキスをする事となった。

「本当に帰って」

悲鳴のように彼女は言う。漫画や映画では浮気したって大した問題になってないってのに、実際にしてみると大した問題だ。

「俺はその子と付き合う気なんてないよ。そのことは彼女にも言うてる」

「知ってるよ。面白いくらい全部話してたよ、君。もう一人言い寄ってきてる子がいることも」

「おおう、そこまで」

思わずケイは声を漏らす。確かに、友人と飲みに行った時、出会った子に好きだと言われている。それに対しては、返答していない。「それは浮気じゃないよ。別にどうこうしたってわけでもないし」

「もう一人は完全な浮気だったけどね」

「ごめん」

事態は振り出しに戻る。深夜2時。重い頭に大した思考力はない。「とにかく寝よう。明日話そう」

冷静な脳なら、こんな申し出を彼女が受けるわけはないと言いもしないはずだが、何しろ酒が残っている。しかし、彼女は従順にも布団に入る。お互い疲れている。何も言わずに背を向け合って眠る。

翌朝、彼女の方が先に起きて、洗濯物だの、家事をしている。ケイが起き上がると、彼女はいつもと同じように

「おはよう」

と言った。ケイも同じように「おはよう」と返す。

「荷物持って帰れる？」

見ると、玄関に大きな紙袋が2つ置いてある。そこには見慣れた

自分の服が入っている。

「持って帰らないよ、置いておく」

子供のような口調でケイが言った。彼女はなるべくこちらを見ないようにして、

「邪魔だから」

と無感情に言った。外から入る太陽の光でケイは目を細めた。小鳥の鳴き声が聞こえる。

「ねえ、俺は別れたくないよ。あの子のことはきちんと精算するから」

「江美ちゃん？」

おしゃべりすぎて困る。

「名前まで言ってたの」

ケイは頭を抱える。彼女は楽しそうに、

「うん。すごくひどいことも色々言われた」

と言う。昨晩からずっと心臓に針がささっているようだ。どんよりと鈍く痛んだり、鋭く痛んだり。

「ごめん」

「謝らなくていいから早く出て行って」

「嫌だ」

彼女はため息をつく。

「こんなやり取りしてたら、きりないじゃない。もう、別れたいのだから、嫌だ」

ケイはうなだれながら、返す。まだ少し頭は痛い。

「好きな子と、自由に付き合ったらいいじゃない。もう誰も怒らない。その方が私というより楽しいでしょ」

「そんなことない」

彼女は絨毯の上に座る。ぬいぐるみは同じ場所にずっといる。ケイはパジャマの自分を見て、生活感が溢れてるな、と思う。そして、もう何度も考えていることを口にする。

「結婚しよう」

彼女は少し黙ったあとに、優しい笑顔を見せて、

「嫌よ、こんな甲斐性なし」

と言った。ケイは手を伸ばして彼女の体の一部に触れようとする。彼女は昨晚のように嫌がらずに、ケイの手は彼女の腰あたりを触った。

「ケイ君にそんな顔されると私が悪いことしてるみたいじゃない」

と彼女は眉を寄せながら優しく言う。いつからか、泣いていた。それに気付いてもいなかった。ケイはさすがのように彼女にキスする。彼女はそれに応じるでもなく、拒むこともなかった。

しばらくそんな風に付かず離れず過ごした。彼女は時々、別れようということもあったが、そのたびにケイはそれを拒み続けた。そこにはずっと消えはしない傷がのこっているが、二人は結局一緒にいる。

## アンブレイカブル

「別れよう」

そう言った彼女の目は真剣だった。真っ黒な瞳が無性に愛しく感じたのを覚えている。でも、トオルは何も言えずに、そして彼女は何も言わずに、その場を去った。

音楽も、灯りもつけずに、部屋で座っていると、深海魚になったような気分になる。

今なら、まだ間に合う。

ぼんやりとした視界を何度も同じ考えがよぎる。このまま何もしなければ、彼女はいなくなる。そしてこれまで過ごした日々も精算される。一人になる身軽さと、彼女の大切さを天秤にかける。それがどちらに傾くのか。

トオルはそんなことをぼんやり考えながら、2日過ごした。そして、彼女に連絡した。

「会って話をしよう」

連絡は一日後に返ってきた。

「部屋に行くわ」

トオルは天井を見上げた。天井に接するものといえば照明しかない。だから天井は丸く電球に切り取られている以外は他に何の干渉も受けない。そんなことを考えていると、部屋のチャイムが鳴る。

しばらくは気付かなかった。うかつにもトオルは寝てしまっていた。慌ててドアを開けると、見慣れた女が立っている。ワンピースに花柄が散りばめられた薄いカーディガン。

「暑くなかった？」

「別にそうでも。寝てたの？」

「うん、まあ」

「相変わらず正直ね」

彼女は部屋に入ると、いつもの場所ではなく、テーブルの前に座

った。

「ベッド、座らないの？」

トオルが聞くと、

「座らないわよ、こういうときは普通」

と短く返す。トオルは冷蔵庫から麦茶を出し、コップに入れる。

彼女はその間、変わらない部屋を見回していた。

グラスを二つ、テーブルに置く。中に入った氷がカラカラと音を鳴らす。古いアパートについているふるいエアコン。グウグウと重い音を鳴らして動く。

「変わってないね」

麦茶を一口飲んだ彼女はつぶやくように言った。

「部屋？」

「うんうん、トオル」

蝉の鳴き声がガラス越しに遠く聞こえている。

「お茶おいしいね」

彼女は言った。

「煎餅、あるけど食べる？」

彼女は煎餅屋の娘で、大学時代の先輩。初めこそ敬語で話していたが、付き合つてすぐに、彼女の方から敬語を使うなと言ってきた。二人は仲がよかったように思う。

「じゃあ湿り煎餅食いたい。そんなことより、話ってなに？」

トオルは棚から煎餅を出してきて、皿に盛り、テーブルに置いた。  
「どうして別れたいの？」

トオルは煎餅に手をのばそうとしてやめた。

「トオル、私に興味が無いでしょ？」

「どうして？」

「だって最近連絡しても全然返してこないし、会おうって言っても断わる日が多い」

思い当たる節はある。最近は色々忙しかった。何より自分にとって大きな変化があり、それに夢中だった。楽しくて仕方が無かつ

たし、彼女の優先順位は下がっていた。

「それは、色々とあって。別に興味がないわけじゃないよ」

「じゃ私のこと好き？」

しばらく考える。好きって感情がどんなものだったか思い出すのに時間がかかるのだ。ずっと前、出会った頃には普通に分かっていた感情。それが思い出せない。

「好きだよ」

彼女は、トオルの顔を見て、テーブルに置かれた煎餅に手を伸ばす。

「もう答えは出てるみたいね」

そう言って彼女は煎餅を持ったまま立ち上がる。トオルは自分の犯した失敗に気付く。それは果たして失敗だったのだろうか。自分は何で彼女とよりを戻そうとしているのか。変化が恐いからか。何かをなくすのが恐いからか。

「そんなことないよ、一緒にいよう」

彼女はトオルの声を聞こえないふりをして、

「形あるものはいずれ壊れる」

そう言って、煎餅を指の間から落とした。煎餅は固いテーブルに当たり、テンテテン、と柔らかな音を立てる。トオルはその煎餅が濡れ煎餅であったことを思い出し、テーブルに落ちたそれに目を落とす。

ばつの悪そうな彼女は、

「例外もある」

と一言加えて、部屋を出て行った。

テーブルの上に落ちた濡れ煎餅だけが残った。再び蝉の鳴き声とエアコンの音が入る。

よかったのだろうか、悪かったのだろうか、その答えは出るのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9263i/>

---

初音ミクの奔走

2010年10月11日03時23分発行